長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第22集

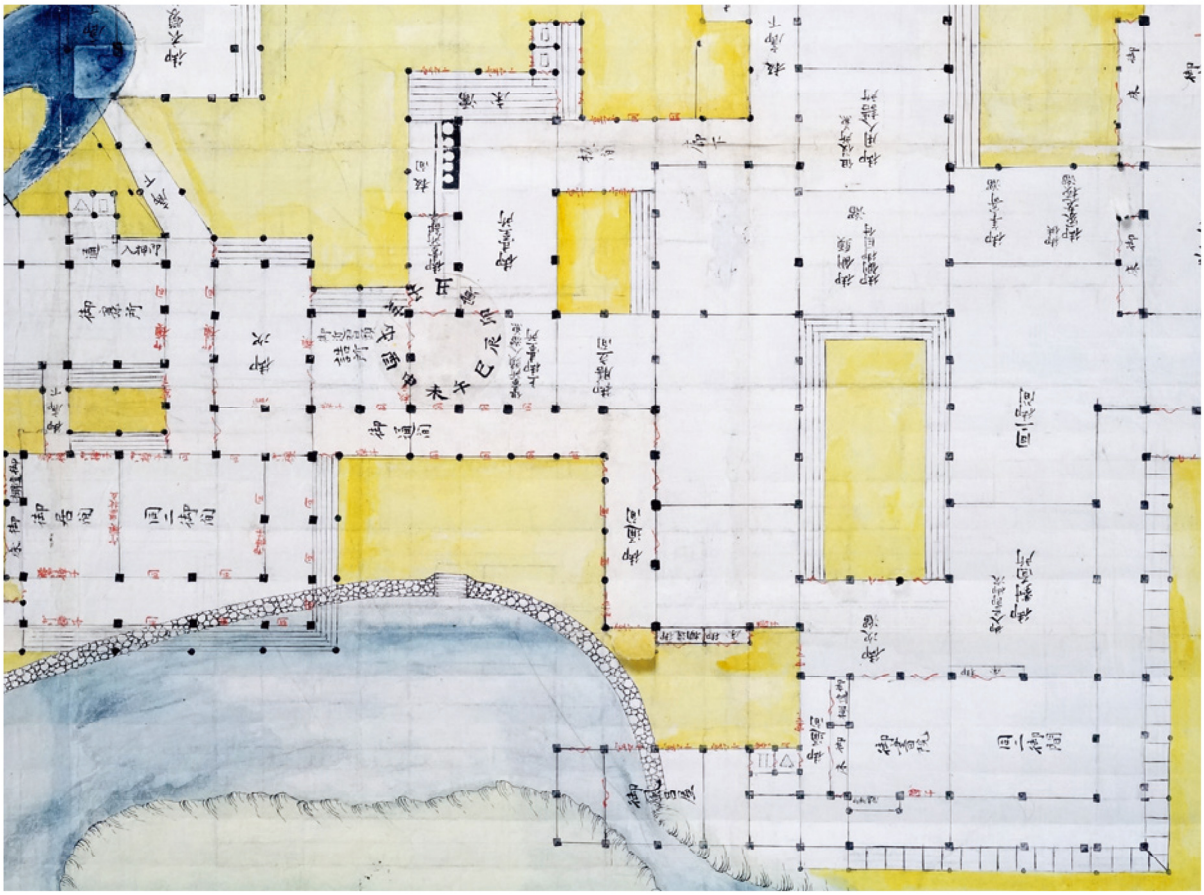
# 諫早家御屋敷跡 Ⅱ

いさはやけ　おやしきあと

長崎県立諫早高等学校図書館棟増設工事
に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１７

長崎県教育委員会



『御屋敷図』（年代不明） 諫早市立諫早図書館蔵

巻頭図版２

『諫早城下図（壱町弐寸御役方指出写）』　文久３（1863）年ヵ
諫早市立諫早図書館蔵

諫早家御屋敷拡大

『諫早城下図』（年代不明）　諫早市立諫早図書館蔵

諫早家御屋敷拡大

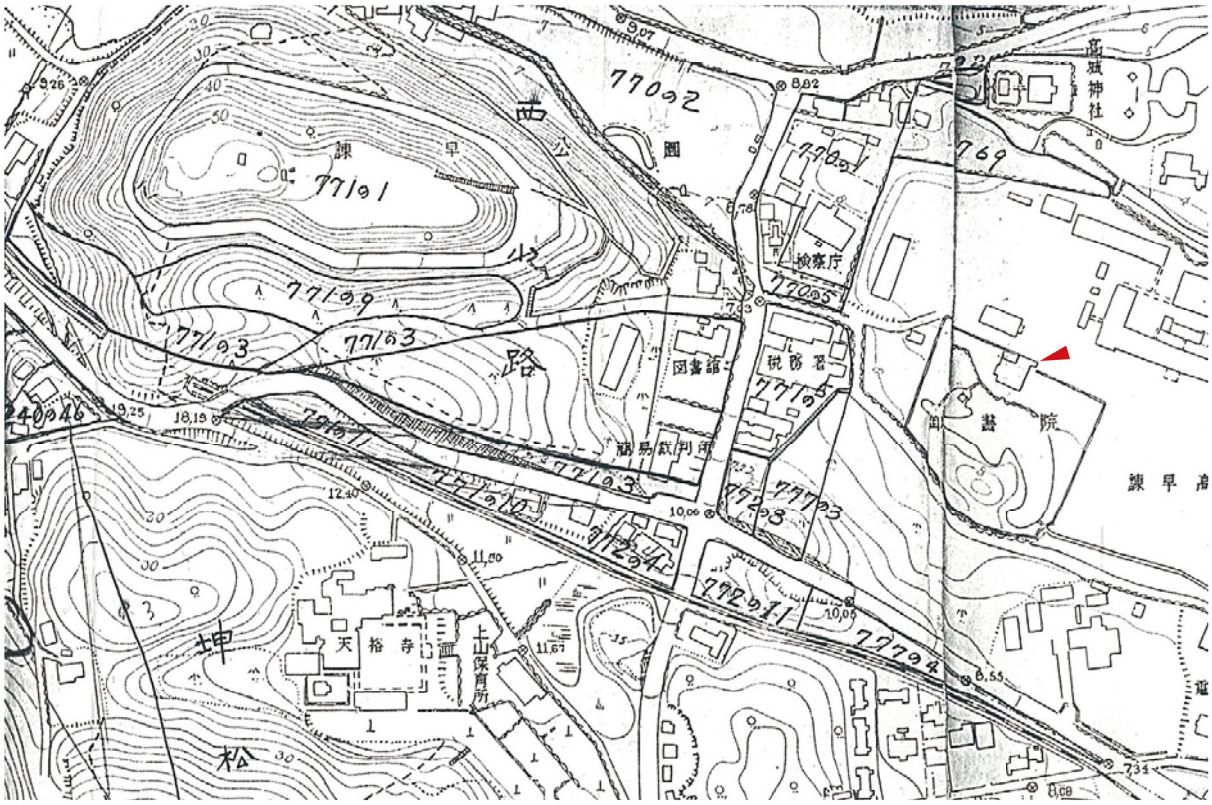
巻頭図版４

諫早家御屋敷跡周辺　遠景　東から
（中央：高城城跡、　中央下：諫早家御屋敷跡、右：本明川）

庭園と調査地点

調査区全景

巻頭図版６




旧御書院の位置　昭和 29 年諫早地形図

旧御書院の位置　昭和 37 年撮影諫早空中写真（国土地理院）

# 刊行にあたって

本書は、長崎県立諫早高等学校の図書館棟増設工事に伴い平成27年度に実施した「諫早家御屋敷跡」の発掘調査報告書です。

「諫早家御屋敷跡」は、中世山城・高城城（別名亀城・諫早城）の麓に築かれた諫早領の領主・諫早氏の居館跡で、「諫早陣屋」とも呼ばれました。中世に高来郡伊佐早を支配していた西郷氏にかわり初代諫早家・龍造寺家晴が領主となったのは1587（天正15）年のことで、２代直孝の代に「諫早」を一族の姓としました。その後、諫早氏は佐賀藩主である鍋島氏から親類同格の地位を与えられ、重臣として藩政を担っていきます。そうした中で、諫早家御屋敷は『領主の居館兼役所』として領の政治を司る重要な場所でした。

御屋敷は明治まで存続していましたが、1923（大正12）年に長崎県立諫早高等学校の前身である諫早中学校（旧制）設立に伴い建物のほとんどが解体され、現在では池泉回遊式庭園と移築された御書院に当事の面影を偲ぶことができます。

今回の調査では、屋敷本体の礎石を上下２段に重なるように検出し、少なくとも２面の建物遺構があることが判りました。屋敷建物の変遷を考えるうえで大変興味深いものです。

この発掘調査に関する諫早市教育委員会文化財課をはじめ諫早市立図書館、諫早市美術・歴史館、長崎県立諫早高等学校など多くの方々のご協力に深く感謝申し上げますとともに、この調査成果が学術的に広く活用され、さらには地域の方々の郷土を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

平成29年　3月31日

長崎県教育委員会教育長

池松　誠二

# 例　言

１．本書は長崎県立諫早高等学校図書館棟増築工事に伴って平成 27 年度に実施した諫早家御屋敷跡の発掘調査報告書である。

２．本書は平成 27 年度長崎県立諫早高等学校の図書館棟改修工事に係る埋蔵文化財発掘報告書作成費にもとづいて発行した。

３．諫早家御屋敷跡の発掘調査は長崎県埋蔵文化財センターが担当した。

４．発掘調査期間と調査組織は以下の通りである。

(1) 範囲確認調査

平成 27 年 8 月 24 ～ 8 月 28 日（調査番号：ISA201510）

長崎県埋蔵文化財センター

| | |
|---|---|
| 所長（当時） | 山　本　忠　敬 |
| 調査課長 | 川　道　　寛 |
| 調査課　主任文化財保護主事 | 松　元　一　浩 |
| 調査課　文化財調査員 | 前　田　加　美 |

(2) 本調査

平成 28 年 2 月 22 日～ 3 月 18 日（調査番号：ISA201518）

長崎県埋蔵文化財センター

| | |
|---|---|
| 所長（当時） | 山　本　忠　敬 |
| 調査課長 | 川　道　　寛 |
| 調査課　主任文化財保護主事 | 松　元　一　浩 |
| 調査課　文化財調査員 | 前　田　加　美 |

５．本調査の準備及び調査において、諫早市教育委員会、諫早市立図書館、諫早市美術・歴史館の協力を得た。

６．本書に収録した遺構・遺物の実測および製図は長崎県埋蔵文化財センターが行った。

７．遺物の実測、及び製図は宮木貴史・前田が担当し、山梨千晶の協力を得た。

８．金属製品の保存処理は業務は長崎県埋蔵文化財センターで行い、片多雅樹、今西亮太、鮫島葵が担当した。

９．本文の石器については川道寛、縄文土器については古澤義久、その他前田が執筆した。

10．本書収録の遺物、図面、写真類は長崎県埋蔵文化財センターで保管している。

11．平面直角座標は世界測地系を、方位は座標北を用いている。

12．空中写真撮影業務は東亜航空技研株式会社に委託した。

13．基準点測量業務は株式会社プロレリックに委託した。

14．本書の編集は松元の協力を得て前田が行った。

# 本文目次

第Ⅰ章　地理的環境・歴史的環境 ……1
　1．地理的環境 ……1
　2．歴史的環境 ……2

第Ⅱ章　調査の経過 ……5
　1．平成 21 年度の調査 ……5
　　（1）試掘調査と包蔵地指定
　　（2）本調査（調査番号：ISA200901）
　2．平成 27 年度の調査 ……5
　　（1）範囲確認調査（ISA201510）
　　（2）本調査（ISA201518）

第Ⅲ章　調査報告 ……7
　1．層序 ……7
　2．遺構 ……7
　　（1）第1面
　　（2）第2面
　3．出土遺物 ……14
　　（1）縄文時代の遺物
　　（2）陶磁器類
　　（3）瓦
　　（4）金属製品

第Ⅳ章　まとめ ……21

# 挿図目次

第1図　長崎県地図 ……1
第2図　諫早家御屋敷跡の周辺遺跡位置図 ‥3
第3図　平成 21 年度・平成 27 年度
　　発掘調査区位置図 ……6
第4図　遺構配置図（1/80）……9
第5図　遺構配置図　第1面（1/80）……12
第6図　遺構配置図　第2面（1/80）……13
第7図　瓦名称図 ……15
第8図　遺物実測図
　　［縄文時代］（1/2・1/3）……16
第9図　遺物実測図
　　［陶磁器類・土師質土器］（1/3）‥‥ 16
第10図　遺物実測図［瓦①］（1/4）…… 17
第11図　遺物実測図［瓦②］（1/4）…… 18
第12図　遺物実測図［瓦③］（1/4）…… 19
第13図　遺物実測図［金属製品］（1/2）‥‥ 20
第14図　諫早市立諫早図書館蔵『御屋敷図』
　　略図 …… 22

# 表目次

第1表　諫早家年表 …… 23
第2表　遺構観察表 …… 24
第3表　礎石観察表 …… 24
第4表　石器観察表 …… 25
第5表　土器・陶磁器類観察表 …… 25
第6表　軒桟瓦観察表 …… 25
第7表　丸瓦観察表 …… 26
第8表　桟瓦類観察表 …… 26
第9表　銅製品観察表 …… 26
第10表　角釘・不明鉄製品観察表 …… 26
第11表　鎹観察表 …… 26

# 図版目次

巻頭図版1　『御屋敷図』（年代不明）
　　諫早市立諫早図書館蔵
巻頭図版2　『諫早城下図（壱町弐寸御役方指出写）』
　　文久3（1863）年ヵ
　　諫早市立諫早図書館蔵
巻頭図版3　『諫早城下図』（年代不明）
　　諫早市立諫早図書館蔵
巻頭写真4　諫早家御屋敷跡周辺遠景　東から
　　庭園と調査地点
巻頭写真5　調査区全景

図版1　1～4 層検出状況
　　5a ～ 5b 層検出状況
　　5c ～ 5d 層検出状況

図版２　藤棚撤去前（西側から）
藤棚撤去後（南西側から）
本調査開始前状況（南側から）
本調査開始前　礎石出土状況（西側から）
調査区北西部　検出状況（南東側から）

図版３　S04-1 検出状況（南東側から）
S04-2 検出状況（北側から）
SK03 完掘状況と S29 南東側から）
S19 半裁状況（東側から）
S01 検出状況（南東側から）
S20 検出状況（北側から）
S05-1 検出状況（南東側から）
SK02 完掘状況と S06（南東側から）

図版４　SK01 完掘状況と S28（南東側から）
S28 検出状況（南側から）
S02-1 検出状況（南東側から）
S17 検出状況（西側から）
S18 検出状況（東側から）
S18 下 貝集中層拡大
S23・S24 検出状況（北東側から）
S23・S24 検出状況（北側から）

図版５　S25 検出状況（北側から）
S26 検出状況（北東側から）
S26 検出状況（南側から）
SK05 完掘状況と S27（南東側から）
S27 検出状況（東側から）
S03 検出状況（南側から）
S03-1・S03-2 検出状況（東側から）
S03-1・S03-2 検出状況（西側から）

図版６　現在の御書院（北西側から）
御書院縁側礎石・見切り石（南西側から）
S07 と礎石据付穴検出状況（西側から）
S030・S31 検出状況（南側から）
S08-1 検出状況（北西側から）
S08-1・S08-2 検出状況（北西側から）
S09-1 検出状況（南東側から）
S09-1・S09-2 検出状況（西側から）

図版７　S10-1 検出状況（南東側から）
S10-1・S10-2 検出状況（西側から）
S11-1 検出状況（西側から）
S11-1 付着オオヘビガイ拡大
S11-1・S11-2 検出状況（北東側から）
S12-1 検出状況（北側から）
S12-1・S12-2 検出状況（南側から）
S12-1・S12-2 検出状況（西側から）

図版８　S11-1・S33 検出状況（南東側から）
S34 検出状況（東側から）
撹乱 4・S15 検出状況（東側から）
S13 検出状況（北東側から）
S14 検出状況（北側から）
S14 検出状況（北西側から）
S16 検出状況（北東側から）
調査区南側４層検出状況（西側から）

図版９　石鏃（遺物番号 1）
縄文土器（遺物番号 2・3）
土器・陶磁器類（遺物番号 4 ～ 14）

図版 10　瓦（遺物番号 15 ～ 20、25、26）
図版 11　瓦（遺物番号 21 ～ 24、27 ～ 38）
SK03 出土漆喰塊
弥生時代～中世の出土遺物
（弥生土器・須恵器・青磁）

図版 12　銅製品（遺物番号 39 ～ 42）
角釘（遺物番号 43 ～ 46）
鎹（遺物番号 47 ～ 50）
４層直上出土ネジ締り錠
学生ボタン

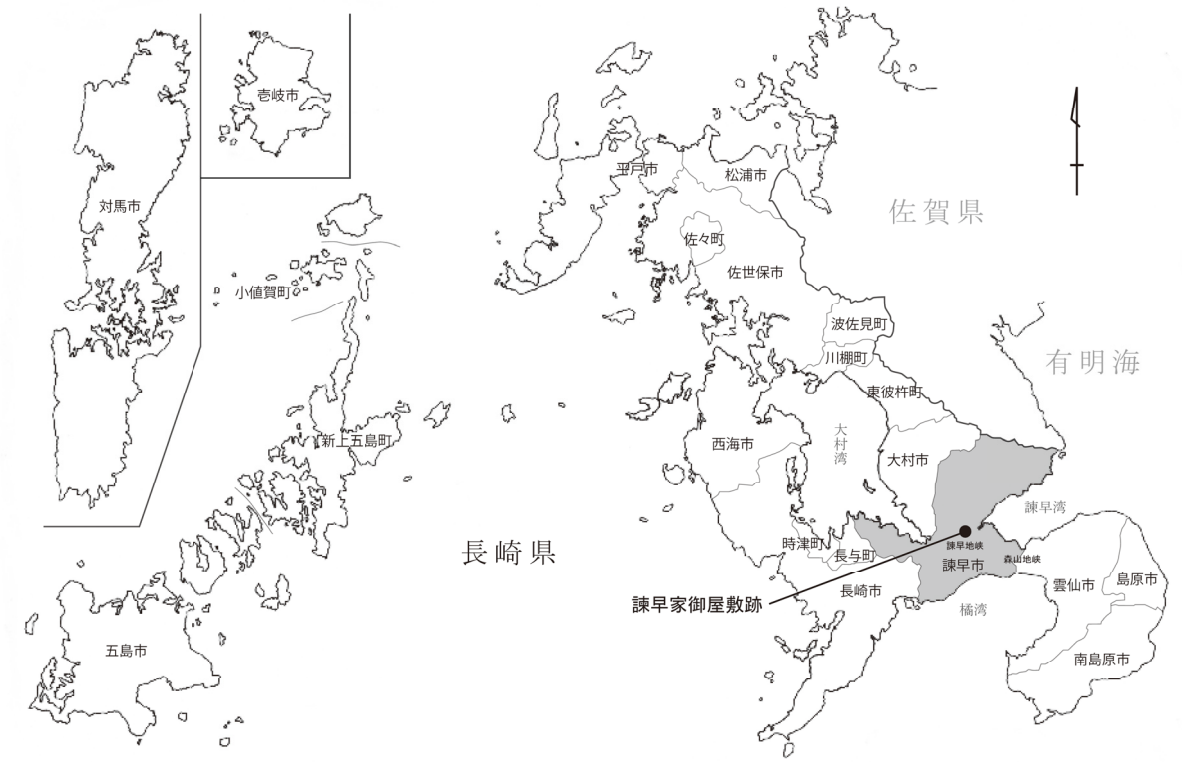
# 第Ⅰ章　地理的環境・歴史的環境

## 1. 地理的環境

諫早市は長崎県の中央部に位置し、北は大村市及び佐賀県藤津郡太良町、西は長崎市と西彼杵郡長与町、東は雲仙市と接する。市域の北側には多良山系の山々がそびえ、西側は長崎半島、南側は島原半島の付け根となっている。また、市域の北西側に大村湾、東側に有明海、南側に橘湾の３つの海に囲まれ、大村湾と諫早湾が内陸へ迫り極端に狭まった所を諫早地峡と呼ぶ。諫早家御屋敷跡は、この諫早地峡にある。この一帯は、佐賀・長崎・島原を結ぶ交通の要衝であり、奈良時代には「船越駅」（現在の船越町付近）が置かれたことが『延喜式』（927 年）に記されている。

市域の東側に広がる諫早湾は、海流によって運ばれた阿蘇山の火山灰が堆積することによって遠浅の干潟を形成している。平地が少ない諫早では、古くから干拓が盛んに行われてきた。1330（元徳 2）年頃の『深江文書』には「船越村（現在の船越町付近）」に「新地」の記述があり、これが干拓の最も古い記録とされる。この記録以前から、自然陸化した土地の開墾は行われてきたと考えられている。17 世紀頃になると人工的な干拓が盛んに行われた。地名に見る「～籠（こもり）」は籠式干拓、「～開」は開式干拓によって農地化された名残である。

市内を流れる本明川は、延長約 28km、支流 34 本の長崎県下で唯一の一級河川である。水源は北の多良山系の五家原岳南西斜面で、上流から山麓までの急斜面を流下すると、南に緩やかに流れ、市街地の天満町、宇都町付近で東に向きを変えて諫早湾に注ぐ。山から海までの距離が短く急勾配という地理的要因から、降雨量により流水量が急増しやすく度々水害を引き起こしている。1699（元禄 12）




第１図　長崎県地図

年の大洪水では487名の死者を出している。当事の領主・諫早家7代茂晴は、領の息災祈願と水難者供養を発願し、本明川水源地の五家原岳富川渓谷の岩壁に五百羅漢を刻ませた。1709（宝永6）年に完成した富側渓谷の五百羅漢は県指定史跡になっている。諫早の眼鏡橋もまた洪水と深い係わりがある。この眼鏡橋は洪水に耐えられる頑丈な橋として長崎の眼鏡橋を手本に1839（天保10）年に眼鏡橋に完成した。1957（昭和32）年の諫早大水害（市内の死者・行方不明者586名）において眼鏡橋は無傷であったが、頑丈な橋脚が浮流物をせき止めたため被害が拡大したとされた。被災後の河川拡幅改修工事により眼鏡橋の解体が計画されたが、眼鏡橋を保存する運動が起こり、翌年の1958（昭和33）年に国指定重要文化財となった。橋は1959（昭和34）年から1年かけて元位置から西に約500 m離れた諫早公園内に移築された。同公園には諫早大水害の慰霊碑が建てられている。

## ２．歴史的環境

諫早家御屋敷跡は、佐賀藩諫早領の領主であった諫早氏の居館跡である。諫早陣屋とも呼ばれ、諫早領の行政の中心地でもあった。遺跡は本明川の右岸低地部にあり、遺跡の西側には文明年間（1469－87）に在地豪族の西郷尚善が築城した高城跡（亀城・諫早城）がそびえる。高城跡は標高50 mを測る楕円形の急峻な丘陵にあり、西から北側にかけて本明川が斜面に沿って流れる。『西郷記』には四方に高櫓を構え、多数の矢狭間があったと記されている。二の丸は本明川を挟んで対岸の正林の高地に築かれた。当事、満潮時には城山崖下の山下淵まで潮水が満ちていたと言われている。高城跡の南側には西郷尚善が禅僧を招いて創建した天祐寺（曹洞宗）がある。この寺は後に諫早氏の菩提寺となり、境内には初代龍造寺家晴から第18代家興までの墓と正・側室・子息、家臣の墓が並ぶ諫早家墓所があり、県指定史跡となっている。

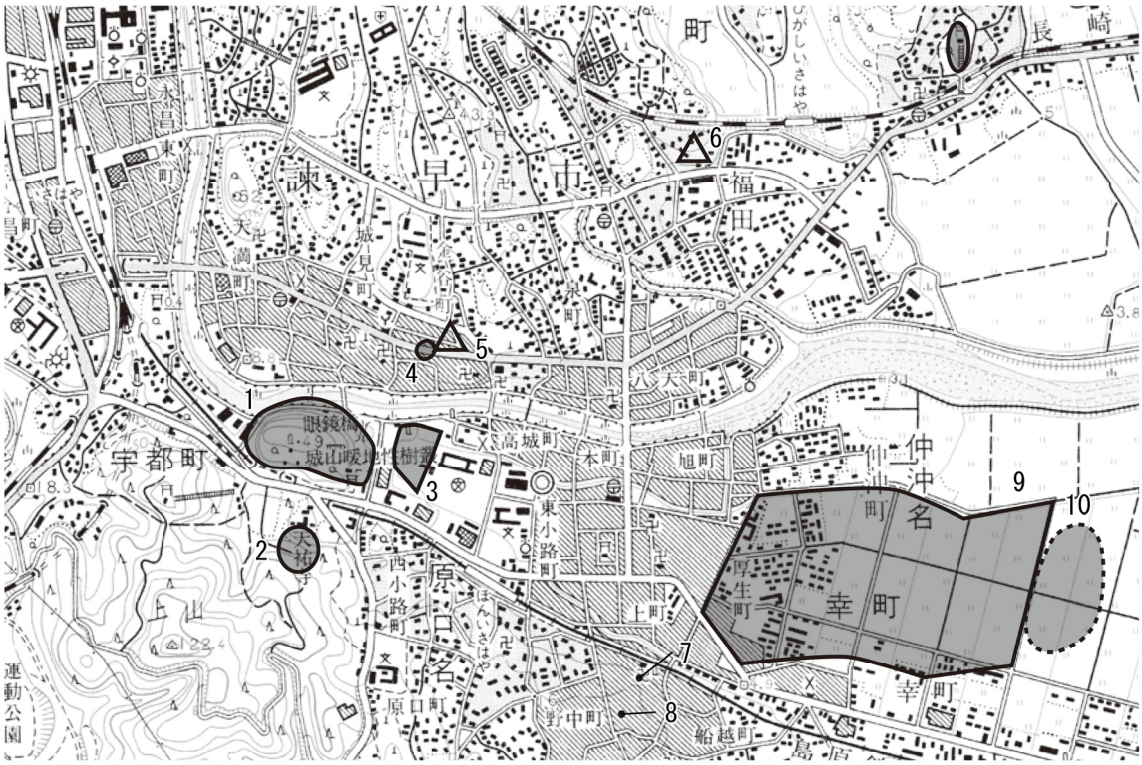
西郷氏は肥後菊池氏の一族と伝えられる。南北朝期頃から台頭し、戦国時代初頭に西郷尚善が伊佐早を治め、有馬貴純の先鋒として大村へと侵攻している。純堯の代には、居城を橘湾（千々石湾）沿いの宇木城から高城へと移し、嬉野の後藤氏や松浦氏と同盟して大村や長崎に度々侵攻していた。天正５（1577）に龍造寺隆信が伊佐早へ侵攻すると、これに降っている。

龍造寺氏は藤原氏の流れを汲むとされ、肥前国の地頭職から戦国大名へと成長した一族である。島津氏･大友氏と九州を三分する一大勢力へと押し上げた龍造寺隆信は「五州二島の太守」（筑前･筑後･肥前･肥後･豊前･壱岐･対馬）を称している。隆信のもとでは､のちに佐賀鍋島藩祖となる鍋島直茂や、初代諫早家となる龍造寺家晴が活躍している。天正12（1584）年の沖田畷の戦いで龍造寺隆信が討死すると、龍造寺氏の勢力は衰え始め、隆信の後継・政家は領国経営を重臣鍋島直茂に委任し、龍造寺・鍋島の二頭体制となった。天正15（1586）年の豊臣秀吉が九州平定のために出陣すると、龍造寺氏は大友氏の侵攻に備えるために結んだ島津氏との和議を破棄し豊臣勢に加わった。島津降伏後の領地分配では、龍造寺家晴が本拠としていた筑後柳河は立花宗茂に与えられた。豊臣勢に参陣したにも関わらず本拠を失った家晴は、大阪への岐路にある秀吉を追い、赤間ヶ関にて秀吉に嘆願した。そのため秀吉は九州平定の際に参陣しなかった西郷氏の領地（肥前伊佐早・二万二千五百二石五斗）を家晴に配分した。家晴は西郷氏に領地の明け渡しを迫ったが、西郷純堯はこれに応じず、家晴は自軍と龍造寺本家の軍勢を率いて伊佐早に討ち入った。西郷氏の居城である高城を攻め落とし、伊佐早領主となった龍造寺氏（後の諫早氏）は、以後280年間に渡りこの地を治めた。敗走した西郷氏は平戸

に落ち延び、松浦氏の家臣となったと伝えられている。

一方、龍造寺・鍋島の二頭体制をとっていた佐賀藩では、慶長 12（1607）年に当主・高房とその父政家が相次いで死去したことにより龍造寺本家は断絶し、鍋島直茂の子・勝茂を当主とする鍋島佐賀藩が成立した。慶長 18（1613）年に家晴から家督を継いだ直孝は、地名を「伊佐早」から「諫早」の字に、姓を「龍造寺」から「諫早」へと改め、伊佐早領は佐賀藩諫早領となった。諫早氏は国家老として佐賀藩を支え、元禄 12（1699）年 7 代茂晴の代には同じ龍造寺系の武雄・多久・須古とともに佐賀藩の親類同格となった。そして 16 代･一学の時に明治の世を迎え､諫早氏による治世は終わる。

1922（大正 11）年に現在の長崎県立諫早高等学校の前進である諫早中学校の設立が計画される。これを受け､当時の諫早家当主･不二雄氏は 1923（大正 12）年に屋敷地を県知事へ寄付した。このとき、屋敷は校舎建設のために解体されるが庭園と御書院は残された。昭和 32（1957）年の諫早大水害の時に県立諫早高等学校は一部の建物が流出するなど甚大な被害を受けた。水害時の最大水位が 3 m以上あったことが当事の写真から窺える。このとき、池は土砂で埋まり庭園が荒廃する原因となってお




| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 種別 | 立地 | 時代 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 高城（たかじょう） | 諫早市高城町 | 城館跡 | 丘陵 | 文明年間（1469 ～ 87） |
| 2 | 諫早家墓所（いさはやけぼしょ） | 諫早市西小路町 | 墳墓 | 平野 | 近世 |
| 3 | 諫早家御屋敷跡（いさはやけおやしきあと） | 諫早市東小路町 | 城館跡 | 学校 | 中世・近世 |
| 4 | 金谷遺跡（かなやいせき） | 諫早市金谷町 | 石造物 | 平地 | 中世・近世 |
| 5 | 正林城（しょうばやしじょう） | 諫早市金谷町 | 城館跡 | — | 中世 |
| 6 | 福田城（ふくだじょう） | 諫早市福田町 | 城館跡 | — | — |
| 7 | 田井原条里遺跡（たいばるじょうりいせき） | 諫早市仲沖町ほか | 条里遺跡 | 平野 | 中世 |
| 8 | 上野町遺跡 1127 地点（うえのまちいせき） | 諫早市上野町 | 遺物包含地 | 畑地 | 中世 |
| 9 | 上野町遺跡 1159 地点（うえのまちいせき） | 諫早市上野町 | 遺物包含地 | 宅地 | 中世 |
| 10 | 沖城跡（おきじょうあと） | 諫早市仲沖町 | 城館跡 | 畑地 | 中世・近世 |

**第２図　諫早家御屋敷跡の周辺遺跡位置図**

り、御書院も相当の被害を受けたようである。その後、御書院は昭和 40（1965）に危険家屋として解体され、昭和 41（1966）年に元の位置から東に 300 mほど離れた場所に再建された。跡地には図書館棟が建設されている。昭和 56（1981）年には長崎県立諫早高等学校創立七十周年記念事業として、洪水の土砂によって荒廃した池の改修工事が行われている。

諫早家御屋敷の築造年代を記した文献は現在のところ確認されていないが、江戸時代の御屋敷の様子がわかる資料には『御屋敷図』（年代不明）、『諫早城下図（壱町弐寸御役方指出写）』（文久３/1863 年ヵ）、『諫早城下図』（年代不明）がある。御屋敷の築造年代については山口祐造氏によって考察がなされている。山口氏は『御屋敷図』で水路の上に衣裳部屋が描かれていることから絵図の池は屋敷計画以前の地形であり、諫早家御屋敷以前に西郷氏の館と庭園が築造され、後に伊佐早の領主となった家晴が西郷氏の館を壊して屋敷を構えたと推測している。（山口 1981）包蔵地指定後にはじめて行われた平成 21（2009）年の調査では、諫早の支配が西郷氏から龍造寺氏へと移行する時期にあたる中世末から近世初頭にかけての溝（SD05）を検出しているが、この建物遺構は検出していない。

移築復元された御書院は、諫早高校茶道部の部活動の場との庭園は開放期間に自由に散策ができるようになっており、御書院と諫早公園・高城公園などを結ぶ路は散策路『高城回廊』として整備され市民の癒しの場となっている。

【参考文献】


正林桃城 1955「第五編」「第六編」『諫早市史　第一巻』諫早市役所

財団法人諫早湾地域振興基金編　1993 「第１章　諫早湾の生い立ちと沿革」『諫早湾干拓のあゆみ』
財団法人諫早湾地域振興基金

林隆広・河合恭典 2001『諫早家御屋敷跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第２集
長崎県教育委員会

寺田正剛・林隆広・宮武直人 2011　『長崎県中近世城館跡分布調査報告書Ⅱ詳説編』
長崎県文化財調査報告書 第 207 集　長崎県教育委員会

古賀　力 2014「九州における龍造寺氏の興亡と諫早氏」『文武全則　武威是備　諫早家ゆかりの品々展』
諫早市美術・歴史館

山口祐造 1981「諫早領主の屋敷図面による御書院再考」『諫早史談』第 13

藤野保編 1983『佐賀藩の総合研究－藩政の成立と構造－』

外山幹夫 1980「長崎県 概説」『日本城郭大系　第 17 巻　長崎・佐賀』 創史社

長崎県立諫早高等学創立百周年記念事業実行委員会編　2011
『創立百周年記念誌　御書院―百年の軌跡、そして未来へ―』長崎県立諫早高等学創立
百周年記念事業実行委員会　株式会社昭和堂

# 第Ⅱ章　調査の経過

## １．平成 21 年度の調査

### （１）試掘調査と包蔵地指定

平成 21 年 4 月、併設型中高一貫教育校「長崎県立諫早高等学校附属中学校」の校舎建設事業計画（平成 23 年 4 月開校予定）が策定された。建設予定地は、長崎県立諫早高等学校の敷地内であった。

高城跡の東側低地部にある長崎県立諫早高等学校の敷地は、1923（大正 12）年に現高校の前身である諫早中学校設立の際に、諫早家から寄贈されたものである。また、1864（文久 4）年作成の「諫早城下図」においても、城の東側に御屋敷が描かれている。

建設予定地は埋蔵文化財包蔵地に指定されていなかったものの、こうした歴史的背景に基づき長崎県教育庁教育環境整備課と協議した結果、工事に先立ち試掘調査を実施することで合意した。試掘調査は、平成 21 年 8 月 22 日から 9 月 8 日にかけて、調査面積 16 ㎡（2 m × 2 m試掘坑 4 ヶ所）を対象に実施した。

試掘調査の結果、試掘坑すべてに室町時代から江戸時代のものと推測される遺構や遺物包含層を確認した。これを受け、周辺約 5,000 ㎡を「諫早家御屋敷跡」として周知するに至った。

### （２）本調査（調査番号：ISA200901）

併設型中高一貫教育校「長崎県立諫早高等学校附属中学校」の校舎建設工事に先立つ試掘調査において、工事予定地を含む一帯が「諫早家御屋敷跡」の埋蔵文化財包蔵地として新たに周知された。これを受けて長崎県教育庁教育環境整備課と再度協議し、工事着手前に記録保存を目的とする本調査を実施することで合意した。本調査は平成 21 年 11 月 30 日から平成 22 年 2 月 4 日にかけて、調査面積 754 ㎡を対象に実施した。

調査の結果、中世末から近代初頭までの資料が出土した。主な遺構は、諫早家御屋敷最終期と思われる石組み区画溝、井戸跡、胞衣壺、土師器溜まりを検出した。遺物は、中世～近代初頭にかけての土器・陶磁器類、瓦が出土した。特質すべきものは、諫早家の家紋「上り藤」の意匠を施した褐色の陶質施釉瓦と、家紋入りの肥前系磁器皿や碗である。

【資料掲載報告書】

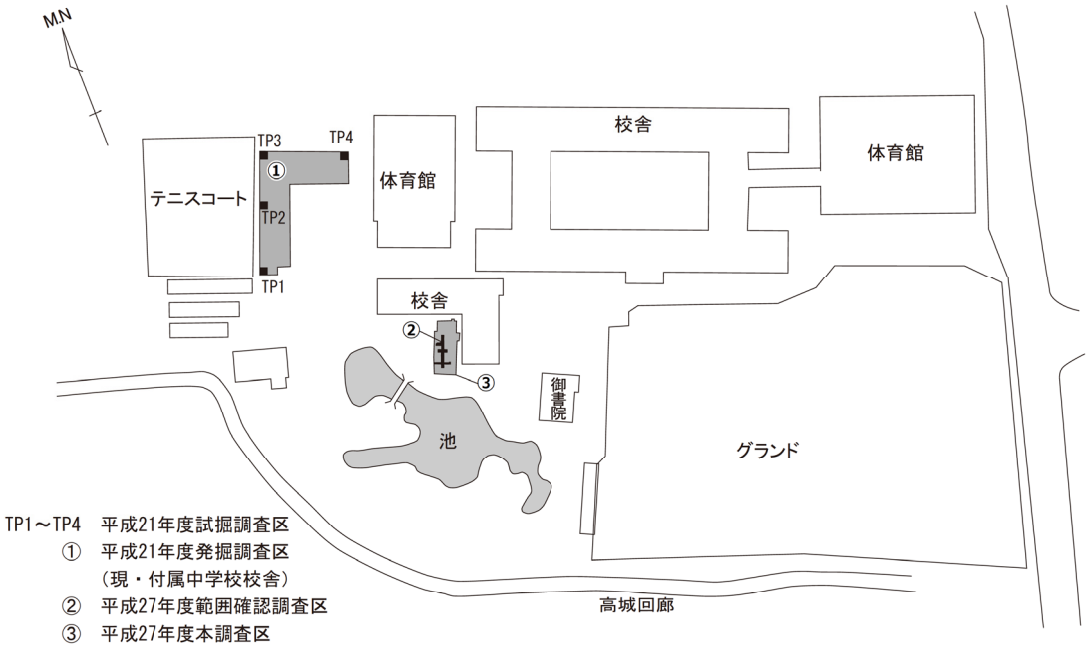
2011『諫早家御屋敷跡』長崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第２集　長崎県教育委員会

## ２．平成 27 年度の調査

### （１）範囲確認調査（調査番号：ISA201510）

長崎県立諫早高等学校は、平成 27 年度に図書館棟増築改修工事が策定された。工事予定地は、現存する諫早家御屋敷由来の池泉回遊式庭園の池の正面で、平成２１年度に本調査が行われた地点から 500 mほど離れた場所にある。「諫早城下図」（1864）や「諫早領主家間取り図」（年代不詳）には、池の正面に建物が描かれており、御屋敷本体の遺構にあたる可能性が高かった。このようなことから、長崎県教育庁教育環境整備課と協議した結果、工事に先立ち範囲確認調査を実施することで合意した。調査は平成 27 年 8 月 24 日～ 8 月 28 日にかけて、調査面積約 15 ㎡を対象に実施した。

調査の結果、整地層から割り石の礎石４点（S01、S02-1、S03-1）、地表に露出する面をビシャンで正方形に仕上げた礎石２点（S04-1、S05-1）の合計６点の礎石と、約１ｍの角柱状の見切石（S22）１点を検出した。その他に近世陶磁器、瓦、角釘、鎹なども出土した。この調査結果を基に協議を行い、記録保存のための本調査を行うことで合意した。




第３図　平成 21 年度・平成 27 年度　発掘調査区位置図

## （２）本調査（調査番号：ISA201518）調査方法

調査開始前、工事対象区内には図書館棟から張り出したコンクリート張りのテラスと藤棚があったが、フジは長崎県立諫早高等学校が調査前に移植を行い、庭園西側の植樹帯に移された。その後、コンクリート撤去作業を立ち会いもと行ったが、作業開始前の時点で硬質砂岩製の礎石１点が地上に露出していた（図版 2）。事前の現地打ち合わせの時点では礎石は無かったため、おそらくフジ移植の際に出土したものと思われる。

本調査は平成 28 年 2 月 22 日～3 月 18 日にかけて調査面積約 120 ㎡を対象に実施した。コンクリート撤去後、礎石の上面が地表に露出している状況が見られた（図版 2）。そのため、重機による表土掘削は薄く剥ぎながら慎重に行った。表土以下は人力による掘り下げを行った。調査区の北端の撹乱坑を人力で掘り下げたところ、調査区に近接する池の水面あたりのレベルで水が染み出した。重機による掘削に切り替えたが湧き水のため中止した。また、礎石列が調査区南側へ続く可能性が考えられため、工事対象区外ではあったが、高校の許可を得て調査区を南に２ｍ拡張した。その結果、2 列分 4 基の礎石を検出した。本調査前の協議にて、検出した礎石の再利用が検討されていたため、調査終了後の埋め戻しの際にいくつかの礎石を重機で引き上げた。

# 第Ⅲ章　調査報告

## １．層序

今回の調査区において確認された土層を６つに分層、以下に説明する。

１ 層 ：褐色粘質土（Hue10YR4/4 しまりやや弱い。粘性やや強い。3cm 角未満の砕石を 4 割含む。現表土。

２ 層 ：暗褐色砂質シルト土（Hue10YR3/4）しまりやや強い。粘性やや弱い。部分的に炭化物の集中する箇所がある。御屋敷を構成していたとみられる多数の桟瓦片や石材片、円礫のほか、車のテールランプ等のプラスチック片・ガラス等の現代遺物を多く含む。2 層上面では昭和 50 年代の空缶が出土した。

３ 層 ：にぶい黄褐色細粒砂土（Hue10YR4/3）しまりやや強い。粘性弱い。所々にラミナが認められ、流水による堆積と考えられる。諫早大水害（昭和 32 年）に起因する可能性がある。

４ 層 ：黄橙～明黄褐色粘質土（Hue10YR8/3 ～ 6/8）しまり非常に強い。浅黄・明褐色土ブロックが混合し、径 3 ～ 15cm の岩片を含む。通称「どんく盤」と呼ばれる地山の混礫固結層に由来すると考えられる。20cm 長の円礫を所々に含み、整地に伴うものとみられる。この層の上面では、桟瓦片、窓ガラス片、ネジ締り錠、銅製襖引き手等の遺物が出土しており、大正～昭和期における御屋敷の解体に伴うものと考えられる。

５ａ層：暗灰黄色シルト質細粒砂土（Hue2.5Y5/2）しまり強い。粘性やや弱い。鉄分の凝集・沈着が所々にみられる。本明川の氾濫に由来する可能性がある。

５ｂ層：褐灰色細粒砂質シルト土（Hue10YR5/1）しまりやや強い。粘性強い。表土より 1m 深で水が染み出す。現存の池の水位と同レベルにあたる。途中に鉄分の水平沈着層が 2､3 枚見え、おそらく地下水位レベル（≒池）の変動によるものと考えられる。下段礎石は、この層に掘り込まれた土坑の底面に根固め石を充填した上に据えられている。

５ｃ層：青灰色シルト土（Hue5B5/1）しまり弱い。粘性強い。礫等は含まず均質。現存の池の水位より低く湿潤状態にある。

５ｄ層：礫層

30 ～ 40cm 長の河原石からなる。青灰色シルト土(Hue5B5/1)が礫の間に入り込む。旧河床か。

## ２．遺構

今回の調査では 2 面で礎石を検出した。平面図は第 4 図・第 5 図・第 6 図の 3 つを掲載する。第 4 図は第 1 面・第 2 面の未分化の図面である。第 5 図は、第 4 図から 4 層の遺構を抽出した図で、第 6 図は 5b 層の遺構を抽出した図である。また礎石は南北軸の単位を列とし、西側からそれぞれＡ列、Ｂ列、Ｃ列、Ｄ列とした。なお、S15 に関してはフジ移植の際に撹乱された可能性が高いため、第 5 図・第 6 図の両方に記載している。

## （1）第１面

第１面では幅３間・奥行５間分の礎石等の建物遺構を検出した。３層は昭和 32 年の諫早大水害による堆積と見られることから、この建物遺構は大正 11 年に解体されずに残り、昭和 40 年に危険校舎として解体された旧御書院のものであると考えられる。４層直上からは瓦の他にネジ締り錠や襖の引手金具が出土しており、御屋敷解体に伴う遺物の可能性がある。礎石は 5a 層に掘り込んだ礎石据付穴に据えられており、その後４層の黄橙～明黄褐色粘質土で覆って整地をしている。礎石の据え方は、礎石据付穴に根石を敷いて礎石を据え、その後に周囲を栗石や角礫で充填して根固めするのを基本としている（S19）。しかし、第１面礎石のほとんどは第２面礎石の直上に据えられており、根石を敷かずに直接第２面礎石の上に据え、板状の石片や円礫を間に咬ませて高さや傾きを調整しているものが大半を占めている。礎石の芯心寸法で見ると、１間は概ね 1.95 m前後（約６尺４寸）であるが、S19 と S01 の間、S11-1 と S12-1 の間は 2.45 m前後（約８尺）と間隔が離れる。

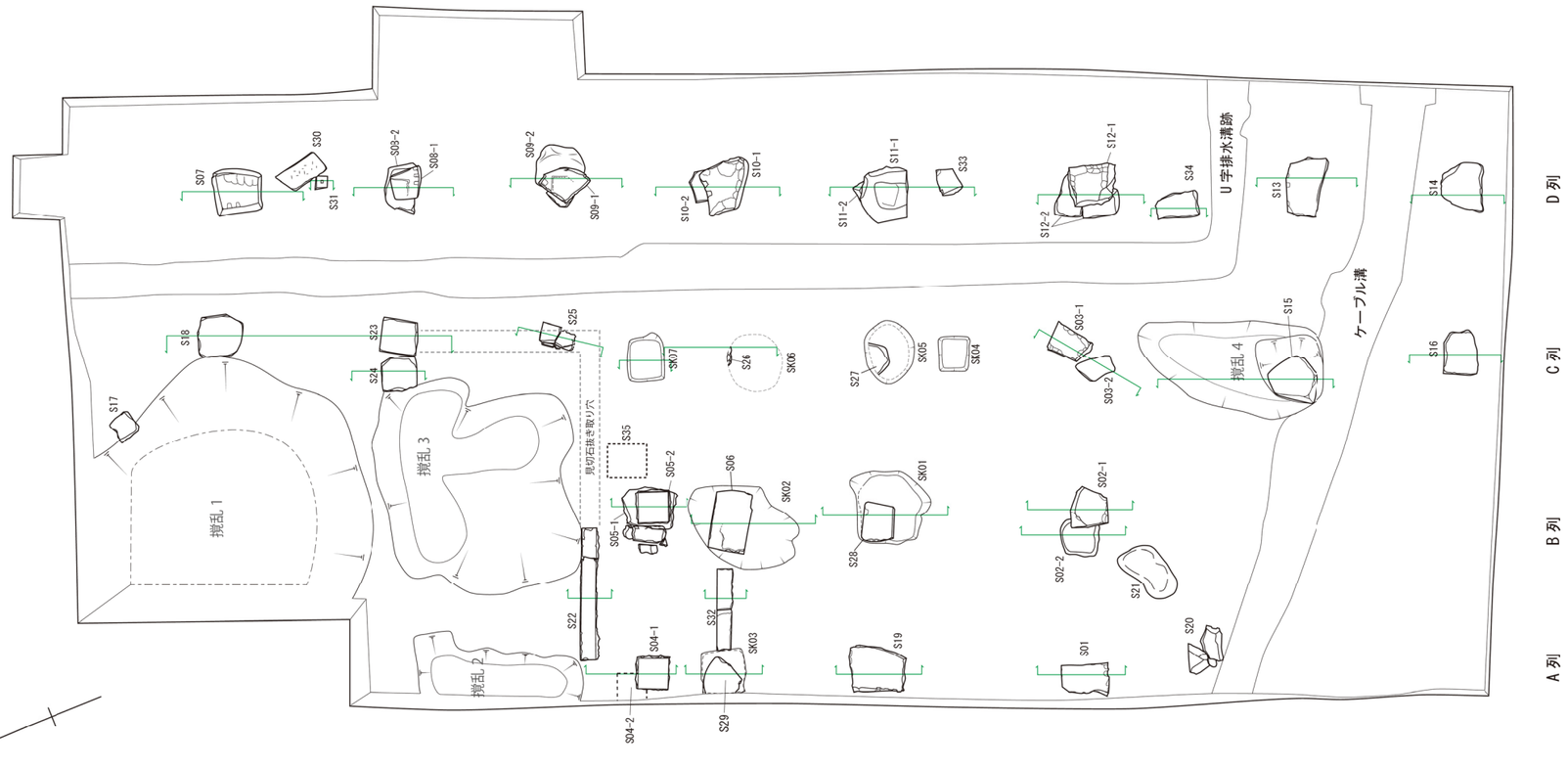
①礎石・見切石

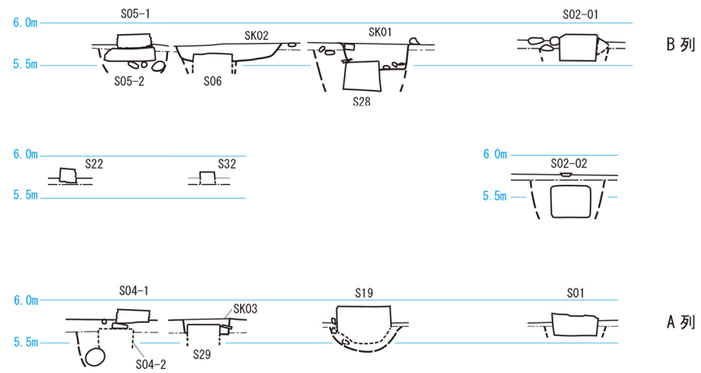
石材は 13 点全て安山岩系である。礎石 10 点（S01・S02-1・S03-1・S07・S08-1 ～ 12-1、S19）は割り石で、台形の矢穴が残り、柱当りを調整しているものが多い。礎石の根固め石には、薄く平たい石片・角礫・円礫が使われている。S02-1・S12-1 では礎石を据えた後に礎石を成形し、その際に出来た石片をそのまま根固めと使用した様子が見て取れる例もある。（図版４・7）S31 は四角錐台形で、上面には四角形のホゾ穴がある。表面は他の礎石に比べて最も滑らかに仕上げられている。移築復元された御書院の縁下（図版 2）の礎石と似る。S04-1・S05-1 は地上に露出する上約 3cm を正方形にビシャンで整形しているが、地下に埋まる部分はハツリで粗く成形したままである。S10-1・S11-1 の自然面にはオオヘビガイの貝殻が付着していた。（図版７）S03-1 は礎石据え付け穴や根石等が見られず、５a 層の上に直接乗っているため（図版 6）、元位置より動いている可能性がある。

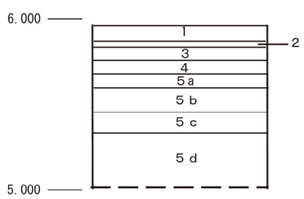
見切石２点のうち、S22 は安山岩系、S32 は硬質砂岩製である。S22 は円礫を敷き詰めた上に据えられていた。上面と北・東・西の４面は平らに整形されているが、南面はほとんど整形されていないことから、北面が人目に接する正面であったと思われる。S32 は S22 の１間南に平行に据えられていた。S22 と比べ各面の整形の差はない。S22 の東には見切石の抜き取り穴が残る。現御書院の工事図面に、旧御書院の見切石を再利用していることが記載されていることから、これに伴うものと思われる。

②その他遺構

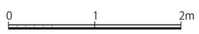
SK07 は S04-1・S05-1 の東西軸の東側延長線上にある。プランは方形であり、S04-1、S05-1 間の芯々寸法とほぼ同じ距離である。S04-1 の南にある SK03 もプランは方形で、礎石列の南北軸と東西軸上にある。SK01・SK02・SK05・SK06 については、S12-1 の根石に見られる安山岩系の薄い石片が埋土あるいは４層に挟まった状態で出土している。位置も礎石列の南北軸と東西軸上にある。これらの土坑は礎石抜け穴である可能性が高い。そのほか、S13、S14、S16 の直上には安山岩系の薄い石片が散乱している。その様相は S12-1 の根石の状況と非常に似ているため、上に礎石が据えられていた可能性がある。S20 は割石の石片で、他の第１面礎石の角度調整や根固めに使われている石に似る。




基本土層図




第４図　遺構配置図・基本土層図・礎石断面模式図 (1/80)

## （2）第２面

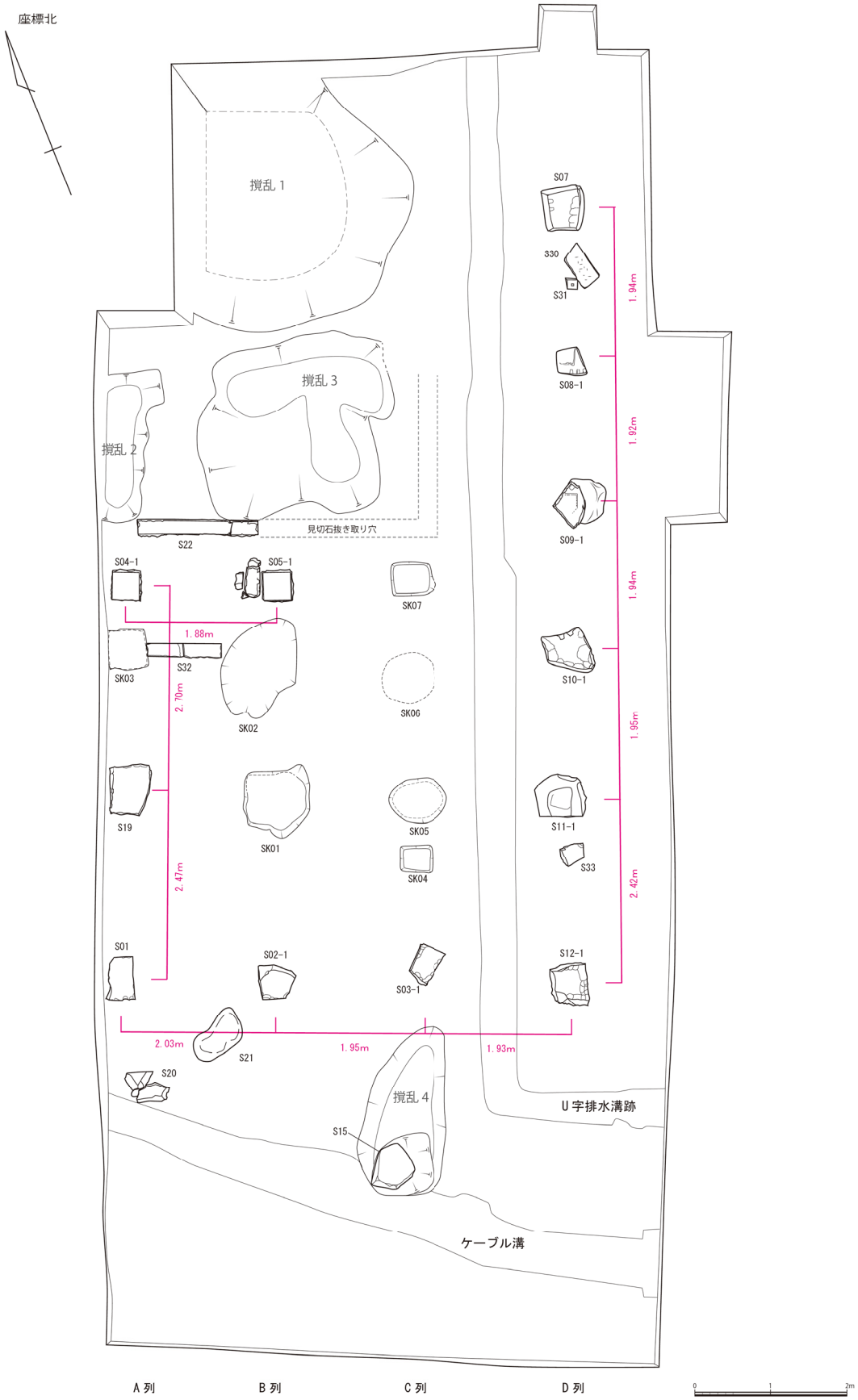
第２面では幅２間、奥行き７間の礎石を検出している。但し、第１面の礎石 S01・S07・S19 の下は未掘である。S04-2・S35 については現地で実測できなかったため、第６図には点線で場所を示した。S17 は重機掘削の際に元位置より動いている。S18 も重機掘削の際に西端が当たり、レベルは動いている。礎石は基本的に 5b 層に掘り込んだ礎石据付穴に拳大の円礫を敷き、礎石を据えたあとに周囲を円礫で充填して根固めしている。第２面礎石の根固めに使用している円礫は、第１面の根固めよりも大きなものが目立つ。ほとんどの礎石は第１面礎石の下から検出しており、芯心寸法で見ると１間は概ね 1.87m 前後だが、S28・S02-2、S27・S03-2、S11-2・S12-2、S12-2・S13 の間は平均 2.45m と間隔が離れる。S11-2・S12-2 は第１面で他所より間隔が開いていた S11-1・S12-1 の直下にある。加えて、第１面礎石のほとんどが第２面礎石の直上から検出していることからも、建て替えの際に第２面の間取りを強く意識していたことが伺える。但し、南北軸は第２面のほうが約２度東に傾く。

①礎石

使用されている石材は S09-2 を除いて全て黄色みを帯びた硬質砂岩である。諫早で産出される硬質砂岩は『諫早石』と呼ばれ、市内の石橋や石畳に広く利用されている。本遺跡の西側に位置する高城跡が築城されていた丘陵でも硬質砂岩が露出しており、石材は近隣で採石されたものである可能性が高い。S09-2 は丸みを帯びた川原石である。第１面に対し、第２面の礎石は大きく２つに割れた礎石が見られ、特にD列で顕著である。これは第１面礎石を据える際に意図的に割ったものと考えらる。そのため第２面の礎石は据えた当時の状態ではなく、後に第１面を据えた際に第２面の礎石や据付穴に手が加えられている可能性を示している。礎石の形状については、平面形が不定四～五角形の割石が主であるが、S06 と S23・S24（接合関係にあり元は一個体）は長方形の板状に成形され、面もノミ切りで整えられている。

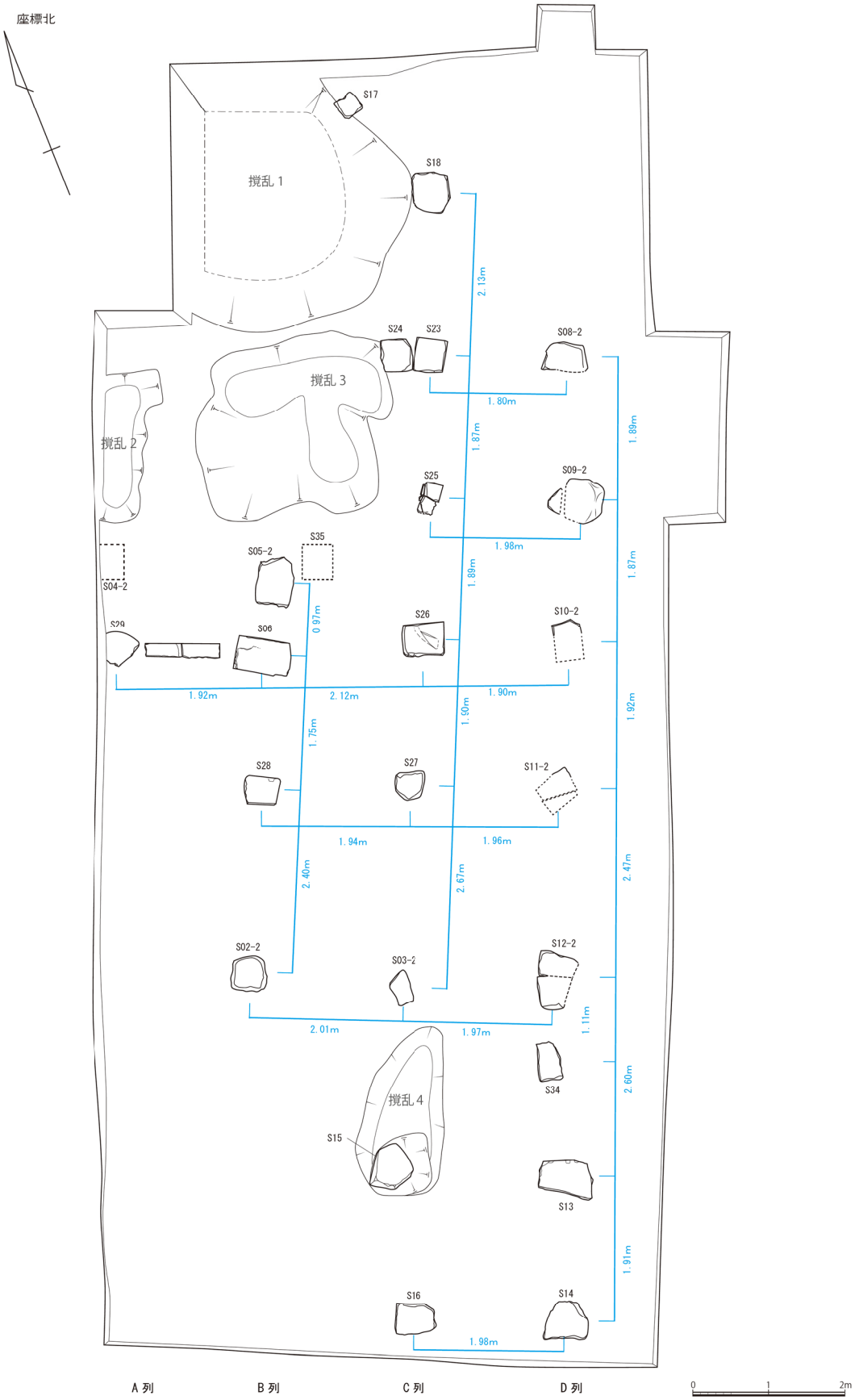
②その他

撹乱１を除去後に、S18 と S23･24 間で調査区の他の地点にはみられない土層を確認した（右写真）。④・⑥層はそれぞれ 5b・5c 層であるが、その間に貝殻の集中する⑤層を挟んでいる。また、③層（黄褐色土）も他地点には存在しないが、基本層序４層のドンク盤由来土に似る。②層は③層のブロックと硬質砂岩や円礫を含む。その上に①層が載っており②層を切るようにも見える。⑤の貝殻層や②③層、①層の堆積過程について明確な所見を示せず今後の検討課題としたい。




※芯心寸法の値については小数点以下第 3 位を四捨五入。

第５図　遺構配置図　第１面（1/80）




※芯心寸法の値については小数点以下第 3 位を四捨五入。

第６図　遺構配置図　第２面（1/80）

## ３．出土遺物

### (1) 縄文時代の遺物〔第８図〕

遺物を包含する層や撹乱坑から近世陶磁器に混じって縄文時代～中世の遺物が出土している。そのうち縄文時代の遺物３点のみ図化した。１は縄文時代後期の黒曜石製剝片鏃で、凹基は浅く、表裏に素材面を大きく残す。基部及び刃部の全周に表裏から交互に細調整を施すが雑である。部分的に鋸歯状のつくりになる。2 は縄文時代中期後半から後期初頭の阿高式系土器、3 は縄文時代後期中葉から晩期の貝殻条痕粗製土器である。いずれも小片であり、今次の調査区が縄文時代に利用された可能性のほか、数次に亘る洪水などでの周囲からの流れ込みも想定される。諫早家御屋敷跡の北に流れる本明川右岸には数箇所の縄文遺跡が知られる。諫早家御屋敷跡から北西約 4km には下峰原高場遺跡、下峰原遺跡、上高原遺跡が所在する。下峰原高場遺跡では多量の貝殻条痕調整晩期土器が出土している（秀島編 2002）。下峰原遺跡では埋甕に利用された貝殻条痕をナデ消した深鉢など晩期の土器が出土している（秀島 1998）。上峰原遺跡でも貝殻条痕調整晩期土器が出土している（高野編 1975）。このほか諫早家御屋敷跡から北西約 2.5km の八天下遺跡では石鏃、スクレイパー、北西約 1.5km の永昌遺跡では黒曜石剥片、南西約 1.5km の平山 A 遺跡では黒曜石剥片がそれぞれ採集されている。諫早家御屋敷跡で出土した貝殻条痕土器は本明川流域に展開した晩期を中心とする時期の営為を反映しているものとみられる。一方、周辺地域での滑石混和土器の報告は少なく、下峰原高場遺跡で早期から前期の所産とされる滑石多量混和土器が１点報告される程度である。諫早家御屋敷跡で出土した滑石混和土器は並木式～坂の下式の無文土器か無文部であると考えられるので、本明川下流域における縄文時代中期後半から後期初頭にかけての土地利用を示す貴重な事例となった。

そのほかに弥生土器・須恵器・青磁などが出土しており、図版 11 に写真を掲載している。

【参考文献】

高野晋司編 1975『諫早北バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第１集 図録編』長崎県文化財調査報告書第 24 集

秀島貞康　1998『下峰原遺跡』諫早市埋蔵文化財調査協議会

秀島貞康編 2002『下峰原高場遺跡』諫早市埋蔵文化財調査協議会調査報告書第４集

### （２）陶磁器類〔第９図〕

今回の調査では 1141 点の土器・陶磁器片が出土したが、ほとんどが１cm 前後の破片であった。第 2 面礎石据付穴から出土した陶磁器類においても、小片であるため詳細な年代は特定できないが、盛峰雄氏（2002）や家田淳一氏（2002）の九州陶磁器編年においてⅣ期（1690 ～ 1780 年代）に属するものが中心である。調査区北側のケーブル溝からは、Ⅰ -2 期（1594 ～ 1610 年代）～Ⅱ期（1610 ～ 1650 年代）に属する唐津系の丸皿が出土している。

【参考文献】

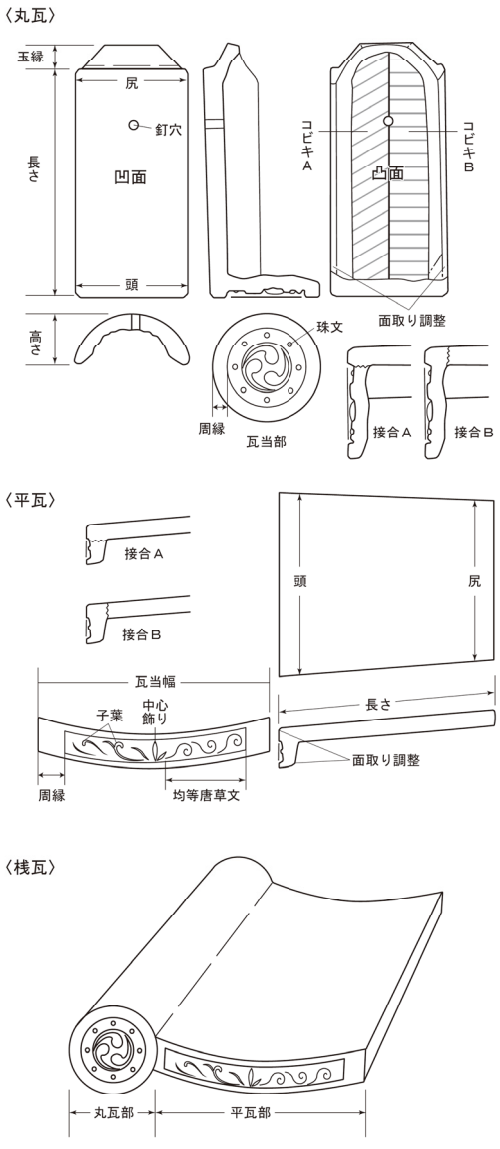
盛峰　雄 2002「陶器の編年　1. 碗・皿」『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会 10 周年記念－』
九州近世陶磁学会

家田淳一 2002「陶器の編年 2. 擂鉢・鉢・片口・水指・茶入・土瓶・水注・灯火具」
『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会 10 周年記念－』九州近世陶磁学会

## （3）瓦〔第１０図・第１１図・第１２図〕

各瓦の部位名称は第７図に従った。出土した軒桟瓦の丸瓦部の瓦当文様は全て連珠文を伴わない左巴で、平瓦部の瓦当文様は４種確認している。15 と同型のものは平成 21 年度の調査でも出土している。25 の丸瓦は凸部に「肥前・牛（島ヵ）製」の押印がある。27 は桟瓦の左端部で、曲がった稜に沿って漆喰が付着している。２層・３層では所々に漆喰塊が混じり、SK03 の埋土中からは瓦の曲線の型がついた塊が出土している。

本遺跡の特徴的な遺物に陶質褐釉瓦があり、平成 21 年度の調査では諫早家の家紋「上り藤」の意匠が施された軒桟瓦が出土している。今回の調査区では瓦当部分ではないが小片２点が出土しているが、今回も遺構に伴った出土ではなく、製作年代の特定には至らなかった。また、施釉せず、表面にキラコが付着した陶質瓦が S18 の礎石据付穴内から出土している。




**第７図　瓦名称図**

※『森岳城跡』長崎県埋蔵文化財調査報告書 166 集　長崎県教育委員会と、『玖島城跡』長崎県埋蔵文化財調査報告書 167 集　長崎県教育委員会を参考に作成した。

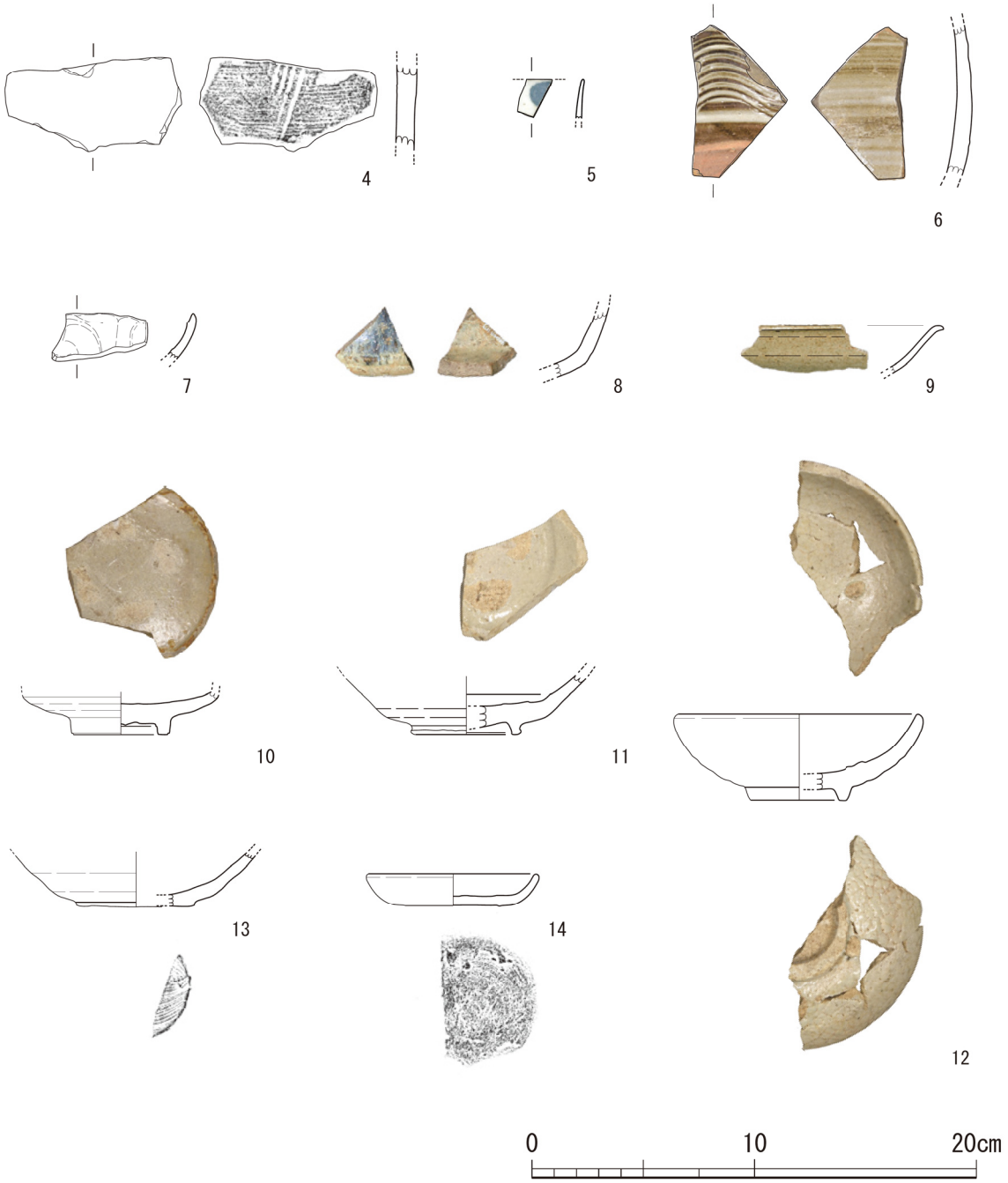
## （4）金属製品〔第１３図〕

表土と４層直上から襖の引手金具の部品である座・底・胴が出土している。39 については彫金や打ち出し等の装飾が無いことから敷座と思われる。41 は本来筒状の胴が潰れ、一部が欠損している。釘穴は２箇所確認でき、その周縁は内から外に向かって湾曲する。42 は用途不明の銅製品である。つくりは厚さ約 1.48mm の銅板を長さ約 11cm の長細い三角形に切断し、三角形の底辺側を約 2.5cm のところで直角に折り曲げ、さらに底辺３～4mm を先ほどとは逆向きに折り曲げて成形している。反対の鋭角側には木目と思われるサビの痕跡が残る。

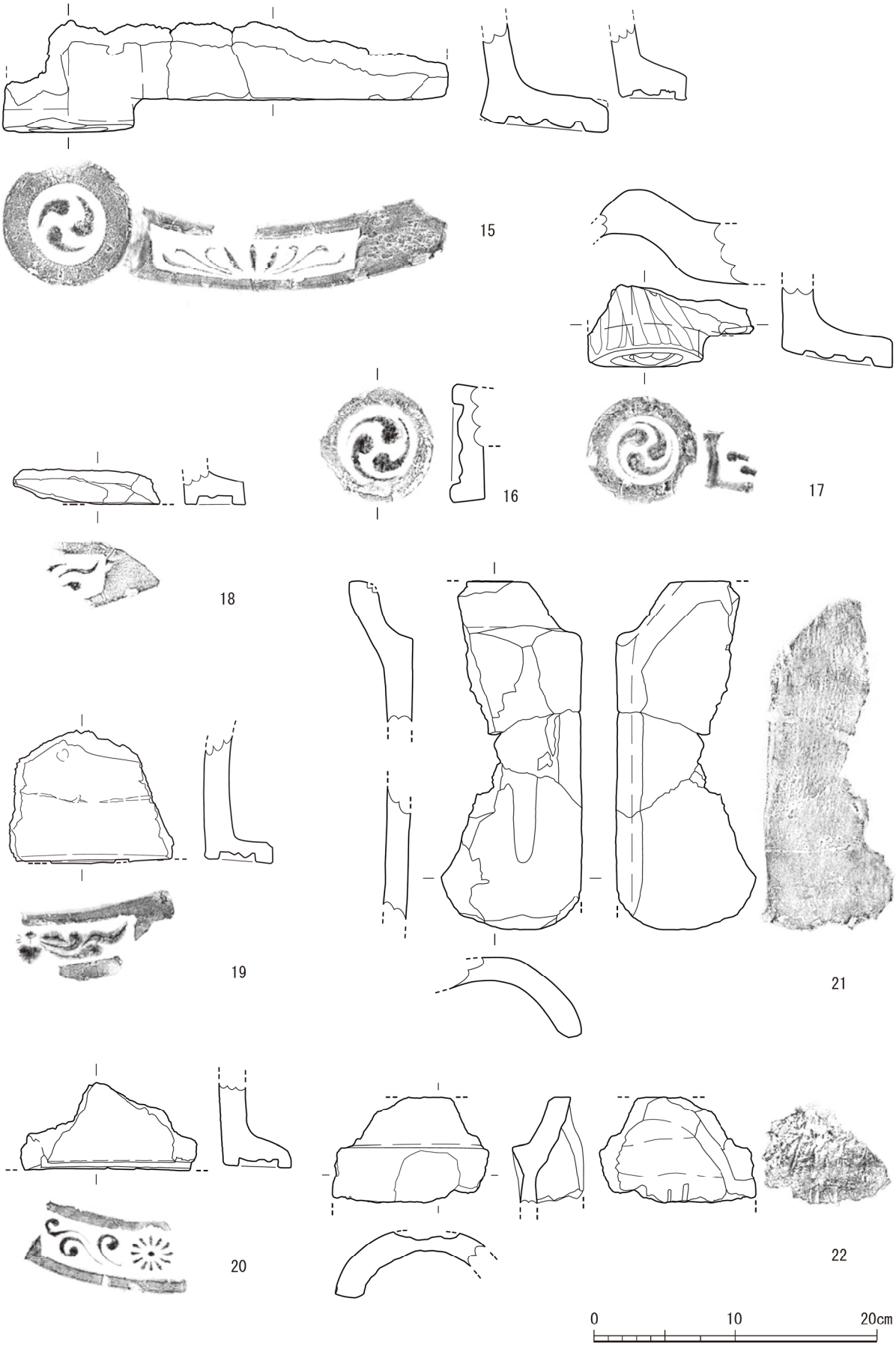
角釘は１～４層直上および北側撹乱坑から８点出土している。43・44 はほぼ同じ大きさで、43 の上部には木質が残っている。45 は釘先が欠損しているが 11cm を超える大型の釘である。47 ～ 50 は鎹で、48 ～ 50 は 18cm 前後とほぼ同じ規格であるのに対し、47 は約 14cm と小形である。

その他、図化はしていないが４層直上から持ち手部分に３つ輪のマークが入ったねじ締り錠が出土している。ねじ締り錠は引き違い戸に取り付ける簡易的な鍵で、明治・大正～昭和中頃の建築物によく見られる。旧御書院でも取り付けられていた可能性がある。また、コンクリートテラス下から諫早高等学校の校章が入ったくるみボタンが出土しており、図書館棟が建設される昭和 40（1965）年以前のものと思われる。この２点は図版 12 に写真を掲載している。

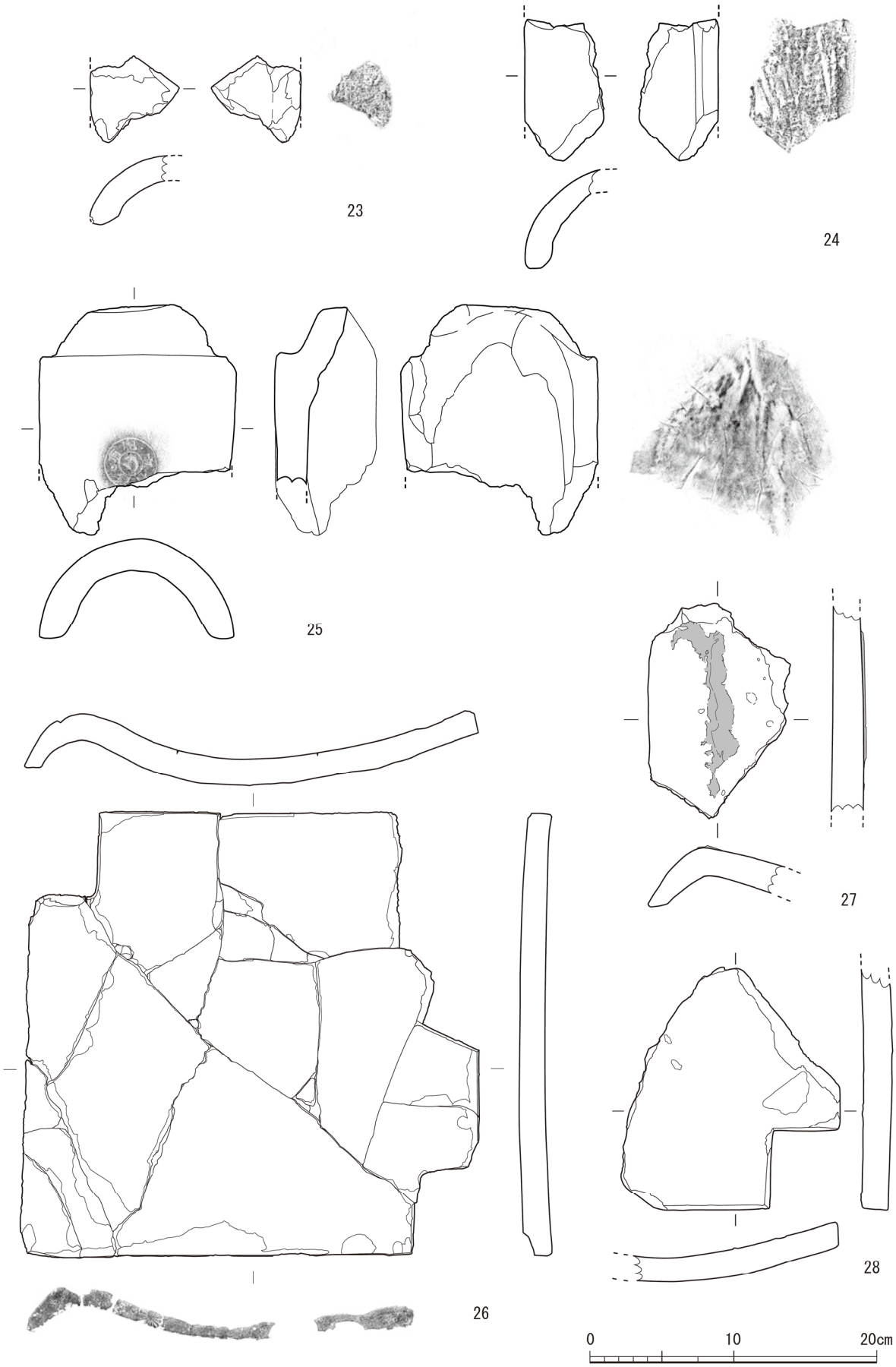
第８図　遺物実測図［縄文時代］　1（1/2）・2～3（1/3）



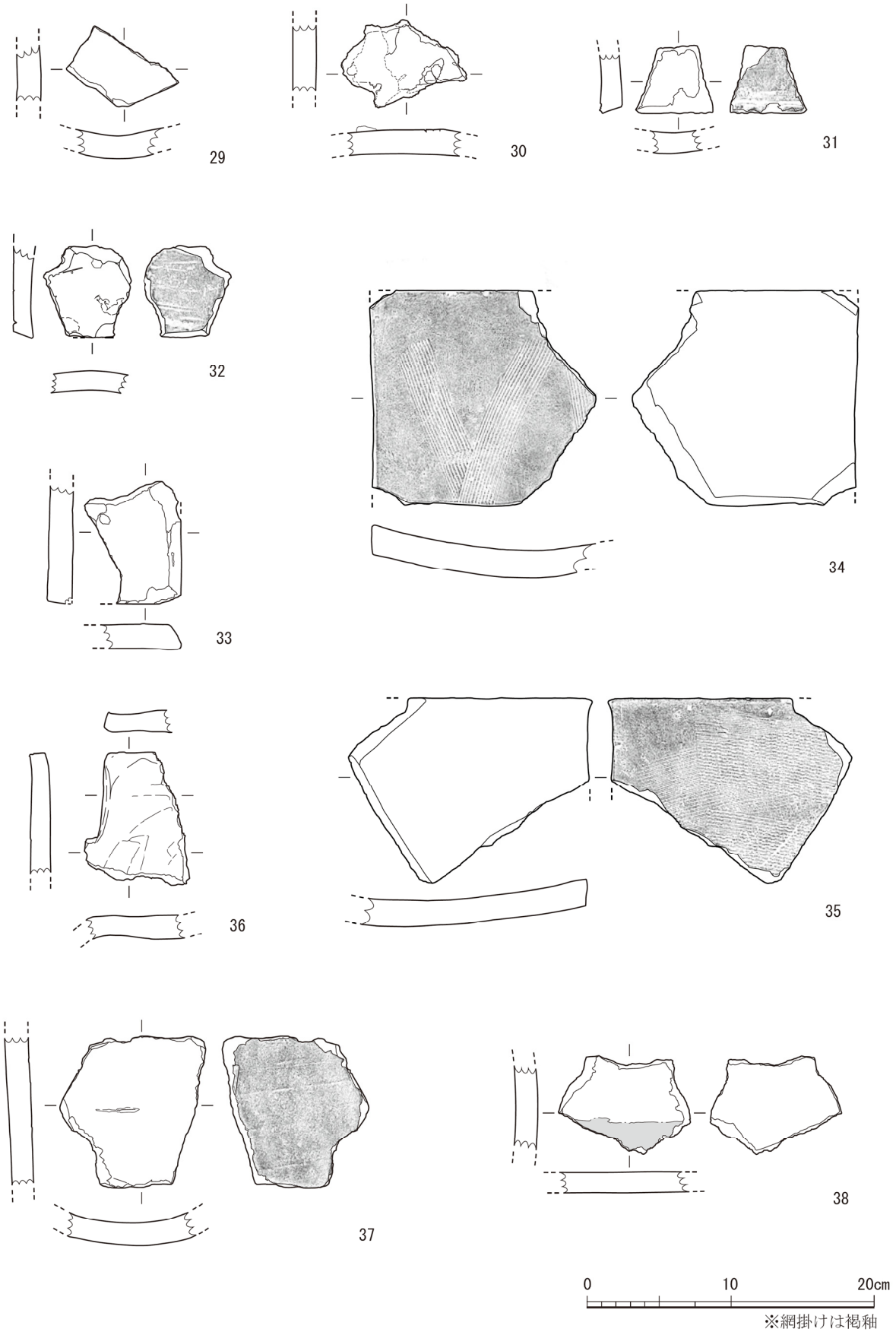

第９図　遺物実測図［陶磁器類・土師質土器］（1/3）



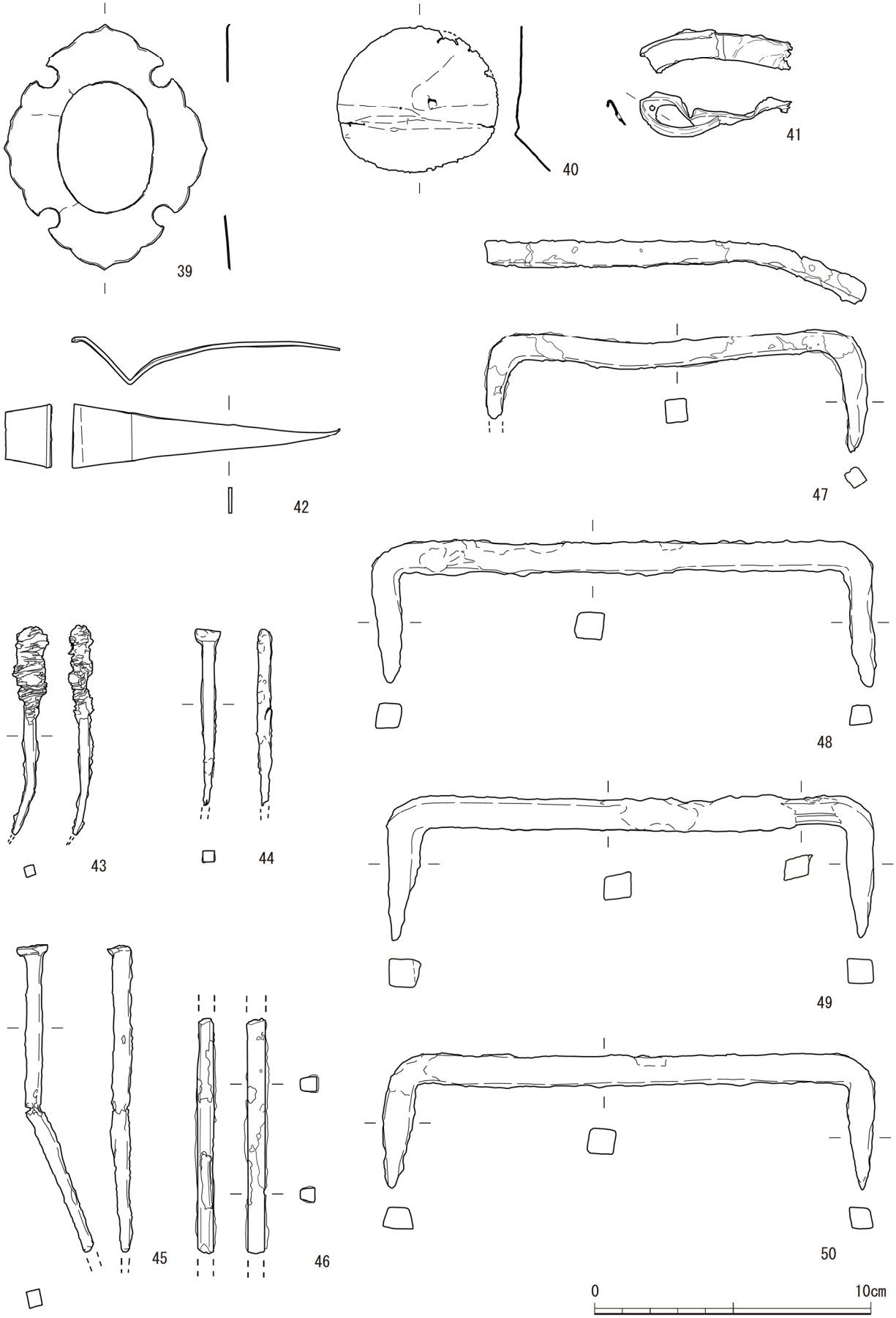

第１０図　遺物実測図［瓦①］(1/4)




第１１図　遺物実測図［瓦②］(1/4)




第１２図　遺物実測図［瓦③］(1/4)




第１３図　遺物実測図［金属製品］(1/2)

# 第Ⅳ章　まとめ

今回の発掘調査では近世の建物遺構を２面検出し、御屋敷は少なくとも２回は建て直されていたことがわかった。第１面礎石のほとんどは、第２面礎石の直上に据えられていることから、第１面の礎石は、第２面を強く意識して配置していることが窺える。第１面は昭和 40（1965）年に解体された御書院の礎石であることから、第２面の礎石も御書院である可能性は高い。但し、２面Ｃ列・Ｄ列の礎石の芯が一直線上に並ばず僅かに歪んでいることから、身舎と廂といった建物構造によるもの、或いは別棟の可能性もある。第２面礎石据付けの時期については、礎石据付穴から主体的に出土する陶磁器類はⅣ期（1690 ～ 1780 年）に属するものが中心である。しかし、既述したように動かされた可能性を考慮する必要がある。

第２面上の 5a 層は、厚く堆積する均質なシルト質細粒砂土であり、洪水に由来する可能性が高い。5b 層・5c 層もシルト土という違いはあるものの、厚く堆積した均質な層である。本遺跡の北側を流れる本明川は度々氾濫を起こしており、江戸時代で最も被害が大きかった元禄 10（1697）年の大洪水について諫早家文書の１つである『日新記』には、佐賀城内の諫早屋敷に詰めていた７代領主・茂晴が諫早領に戻ると、御屋敷も水漬けとなり入れなかったため福田（平泉寺）のお茶屋に入ったことが記されいる。この記述から洪水時の水位は屋敷床よりも高かったことがわかる。これ以外にも本明川は橋を流すような氾濫を繰り返している。今回の調査では 5a ～ 5c 層出土の遺物が乏しいため、年代を確定するのは難しく今後の課題である。5a 層が洪水堆積の可能性が高いことを考えるとき、旧御書院が昭和 40（1965）年に解体された要因の１つに水害による建物への影響があったように、江戸時代の建て替えにも洪水の影響があったことが想定される。

今回の調査区から北西に 500 ｍほど離れた平成 21 年度の調査区では、中世末から近世初頭にかけての溝（SD05）を検出している。この時期は諫早の支配が西郷氏から龍造寺氏へと移行する時期であり、西郷氏の屋敷の存在を想起させる遺構であった。今回の調査でも、この溝（SD05）から出土したものと同様の土師質土器（遺物番号 10）が出土している。

第Ⅰ章で述べたように諫早家御屋敷の創建年代について記載した資料は現時点では確認されていない。当時の諫早領の状況から創建は諫早家初代・家晴の頃で、それ以前には西郷氏の館があったのではないかと推測されてきた（山口 1981）。しかし、今回の調査区からは、これを裏付けるような遺構や遺物は確認されなかった。

【参考文献】

山口祐造 1981「諫早領主の屋敷図面による御書院再考」『諫早史談』第 13 号

林隆広・河合恭典 2011『諫早家御屋敷跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第２集　長崎県教育委員会

正林桃城 1955「第六編　第十一章　本明川の洪水」『諫早市史　第一巻』諫早市役所

盛峰　雄 2002「陶器の編年　1. 碗・皿」『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会 10 周年記念－』
九州近世陶磁学会

家田淳一 2002「陶器の編年 2. 擂鉢・鉢・片口・水指・茶入・土瓶・水注・灯火具」
『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会 10 周年記念－』九州近世陶磁学会

第１４図　諫早市立諫早図書館蔵『御屋敷図』 略図

**第１表　諫早家年表**

| 西暦 | 元号 | 全国の出来事 | 諫早の出来事 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 1469-1486 | 文明年間 | | 西郷尚善により高城築城。 | |
| 1586 | 天正 14 | 豊臣秀吉による九州平定が始まる。 | | |
| 1587 | 天正 15 | | 西郷氏に代わり、初代諫早家・龍造寺家晴が諫早領主となる。 | |
| 1600 | 慶長 5 | 関ヶ原の戦い | | |
| 1603 | 慶長 8 | 徳川家康が征夷大将軍に任命される。 | | |
| 1607 | 慶長 12 | 鍋島佐賀藩成立 | | |
| 1613 | 慶長 18 | | 家晴二男・直孝（なおのり）、家督を継ぐ。（2 代） | |
| 1615 | 慶長 20 | 一国一城令制定 | | |
| 1619 | 元和 5 | | 佐賀藩より七浦江東１万石を召し上げられる（三部上知）。姓を龍造寺から諫早に改める。 | |
| 1635 | 寛永 12 | | 直孝嫡男・茂敬（しげひら）、家督を継ぐ。（３代） | |
| 1637 | 寛永 14 | 島原の乱が勃発。 | 島原の乱に出陣する。 | |
| 1652 | 承応元 | | 茂敬三男・茂眞（しげざね）、家督を継ぐ。（４代） | |
| 1652-1654 | 承応年間 | | 高城の構造物を撤去。 | |
| 1672 | 寛文 12 | | 茂眞四男・茂門（じげかど）、家督を継ぐ。（５代） | |
| 1680 | 延宝 8 | | 茂眞五男・茂元（しげもと）、家督を継ぐ。（６代） | |
| 1694 | 元禄 7 | | 鍋島直氏二男・茂晴（しげはる）、家督を継ぐ。（７代） | 『御屋敷図』年代不明 |
| 1697 | 元禄 10 | | 本明川の氾濫により大洪水が起こる。死者 487 人。 | |
| 1699 | 元禄 12 | | 佐賀藩親類同格となる。 | |
| 1732 | 享保 17 | | 茂晴二男・茂行（しげゆき）、家督を継ぐ。（８代） | |
| 1749 | 寛延 2 | | 茂行嫡男・行孝（のりゆき）、家督を継ぐ。（９代） | |
| | | | 諫早一揆が起こる。 | |
| 1753 | 宝暦 3 | | 茂行二男・茂成（しげなり）、家督を継ぐ。（10 代） | |
| 1769 | 明和 6 | | 茂行三男・茂圖（しげつぐ）、家督を継ぐ。（11 代） | |
| 1810 | 文化 7 | | 洪水により本明川の石橋が流される。 | |
| 1812 | 文化 9 | | 敬輝嫡男・茂洪（しげひら）、家督を継ぐ。（12 代） | |
| 1839 | 天保 10 | | 眼鏡橋完成 | |
| 1845 | 弘化 2 | | 茂洪四男・茂喬（しげちか）、家督を継ぐ。（13 代） | |
| 1848 | 嘉永元 | | 茂洪六男・茂孫（しげたね）、家督を継ぐ。（14 代） | |
| 1852 | 嘉永 5 | | 茂喬嫡男・武春（たけはる）、家督を継ぐ。（15 代） | |
| 1862 | 文久 2 | | 茂洪七男・一学（いちがく）、家督を継ぐ。（16 代） | 『諫早城下図』文久３年ヵ（壱町弐寸御役所方指出） |
| 1857 | 安政 4 | | 愛宕山の鳥居建立。 | |
| 1867 | 慶応 2 | 大政奉還 | | 『諫早城下図』年代不明 |
| 1922 | 大正 11 | | 諫早不二雄氏、中学校建設のため県知事へ諫早家の屋敷地を寄付。屋敷建物は御書院を除いて解体。 | |
| | 大正 12 | | 長崎県立諫早高校の前進である諫早中学校が開校。 | |
| 1932 | 昭和 7 | | 御書院の池が「おしどりの池天然記念物」として文部省の指定を受ける。 | |
| 1941 | | 太平洋戦争勃発 | | |
| 1945 | | 終戦 | | |
| 1957 | 昭和 32 | | 諫早大水害。諫早高等学校の敷地に２ｍ以上の水が押し寄せ、教室に約 50cm の泥が溜まる。 | ３層 |
| 1959 | 昭和 34 | | 御書院の池が「おしどりの池が天然記念物」の指定を解除される。 | |
| 1965 | 昭和 40 | | 御書院は危険校舎として解体、図書館等竣工。 | ２層・北側撹乱坑 |
| 1966 | 昭和 41 | | 御書院が池の東側に復元移転。 | |
| 1981 | 昭和 56 | | 長崎県立諫早高等学校創立七十周年記念事業として御書院池修復工事が行われる。 | |

## 第２表　遺構観察表

| 遺構番号 | 検出面 | 上端標高 | 下端標高 | 備考 | 遺構番号 | 検出面 | 上端標高 | 下端標高 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SK01 | 4層(第1面) | 5.76 | 5.55 | 礎石抜き取り穴か。 | SK07 | 4層(第1面) | 5.75 | 5.60 | 礎石抜き取り穴か。 |
| SK02 | 4層(第1面) | 5.75 | 5.64 | 礎石抜き取り穴か。 | 撹乱1 | 4層(第1面) | 5.56 | | 礎石抜き取り穴か。 |
| SK03 | 4層(第1面) | 5.79 | 5.72 | 礎石抜き取り穴か。 | 撹乱2 | 4層(第1面) | 5.56 | | 礎石抜き取り穴か。 |
| SK04 | 4層(第1面) | 5.74 | 5.64 | 礎石抜き取り穴か。 | 撹乱3 | 4層(第1面) | 5.72 | | 礎石抜き取り穴か。 |
| SK05 | 4層(第1面) | 5.78 | 5.70 | 礎石抜き取り穴か。 | 撹乱4 | 4層(第1面) | 6.72 | 5.31 | 礎石抜き取り穴か。 |
| SK06 | 4層(第1面) | 5.78 | 5.68 | 礎石抜き取り穴か。 | | | | | |

## 第３表　礎石観察表

| 位置 | | | 礎石 | | | | | | | | 据付穴 | | | | | | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 列 | 面 | 番号 | レベル | 平面形状 | 法量［ｃｍ］ | | | 石材 | 加工痕跡 | | 法量［ｃｍ］ | | | 遺物 | 充填礫 | | |
| | | | | | 長軸 | 短軸 | 厚み | | 矢穴痕跡 | 面調整痕 | 長軸 | 短軸 | 深さ | | 密度 | 礫種 | |
| A | 1 | S04-1 | 5.89 | 正方形 | 36 | 36 | 19 | 安山岩 | | ビシャン仕上げ | | | | | 密 | | 礎石は、地表に出る上約3cmは平らになるようビシャンで成形されているが、地下に隠れる部分は粗く打ち欠いたままにしている。SK04-2の直上に据えられており、水平は板状の川原石をSK04-2との間に挟んで調整している。 |
| A | 2 | S04-2 | | 長方形 | | | | 砂岩 | | | | | | | 超密 | 長径約25cmの川原石 | 礎石の面は平らに成形している。根石は長径25cm前後の川原石を密に詰めている。 |
| A | 2 | S29 | 5.72 | 扇形 | | 41 | | 砂岩 | | | | | | | 超密 | 長径約16cmの剥離片・長径約19cmの円礫 | 礎石は調査区西際で検出しており、長軸の長さは未測定である。礎石上面は平らに整えられている。 |
| A | 1 | S19 | 5.96 | 台形 | 64 | 38 | | 安山岩 | 2面6箇所 | | 85 | 80 | 29 | | 密 | 長径約10cmの円礫 | 礎石の断面は逆台形を呈する。 |
| A | 1 | S01 | 5.82 | 長方形 | 55 | 25 | 21 | 安山岩 | 1面4所 | 柱あたり | | | | | | | |
| B | 1 | S05-1 | 5.86 | 正方形 | 36 | 36 | 30 | 安山岩 | | ビシャン仕上げ | | | | | 無 | | 地表に出る上約3cmは平らになるようビシャンで整形されているが、地下に隠れる部分は粗く打ち欠いたままにしている。S05-2直上に据えられており、水平は礎石剥離片と思われる石片を使って調整している。 |
| B | 2 | S05-2 | 5.70 | 不定長方形 | 66 | 30 | 18 | 砂岩 | | | | | | | | | 礎石の上面は平坦だが、側面は他の砂岩質礎石に比べ、粗く打ち欠いている。 |
| B | 2 | S06 | 5.64 | 長方形 | 71 | 43 | | 砂岩 | | ノミ切り | | | | 唐津系陶器皿(遺物番号10) | | | SK02より検出。上に長径23cmの安山岩質剥離片2点が乗り、直上に礎石が据えられていた可能性がある。 |
| B | 2 | S28 | 5.54 | 不定台形 | 45 | 36 | 34 | 砂岩 | 1面3箇所 | | 116 | 80 | | | 超密 | 長径約20cmの剥離片・長径約10～31cmの円礫 | SK01より検出。礎石は下に向かってわずかに細くなるが、ほとんど立方体に近いをしている。上端周辺に安山岩質の剥離片がやや散乱することから、直上に礎石が据えられていた可能性がある。 |
| B | 1 | S02-1 | (5.84) | 不定五角形 | 44 | 19 | 31 | 安山岩 | | | 77 | 70 | | | 少 | 長径約27cmの剥離片 | 礎石由来の剥離片を根石として使用している。 |
| B | 2 | S02-2 | (5.63) | 台形 | 42 | 36 | 34 | 砂岩 | | | | | | | | | |
| C | 2 | S17 | (5.53) | 台形 | 22 | 22 | 12 | 砂岩 | | | | | | | 不明 | | カクラン除去の際にバックホウによって元位置から動いている。 |
| C | 2 | S18 | (5.51～5.64) | 不定五角形 | 45 | 22 | 10 | 砂岩 | | | 122 | (90) | | 陶質瓦2点(遺物番号36・37) | 超密 | 長径13～36cmの円礫 | カクラン除去の際にバックホウが西端に当たり水平が傾く。 |
| C | 2 | S23 | (5.64) | 台形 | 42 | 32 | 23 | 砂岩 | | | | | | | 密 | 長径22cm～30cmの安山岩質の剥離片2点。長径約12～25cmの円礫 | S24と接合関係である。 |
| C | 2 | S24 | (5.63) | | 41 | 23 | 30 | 砂岩 | | | | | | 瓦3点(遺物番号28・29・30) | 密 | | S23と接合関係である。 |
| C | 2 | S25 | 5.72 | 長方形 | 40 | 22 | | 砂岩 | | | | | | | | 長径12～20cmの安山岩質の剥離片・長径12～23cmの円礫 | 大きく2片に割れている。礎石上端周辺に安山岩質の剥離片が散乱するため、直上に礎石が据えられていた可能性がある。 |
| C | 2 | S26 | 5.64 | 長方形 | 54 | 43 | 37 | 砂岩 | 1面2箇所 | | 113 | 110 | | | 超密 | 長径12～36cmの円礫 | |
| C | 2 | S27 | 5.69 | 不定五角形 | 32 | 22 | 43 | 砂岩 | 1面4箇所 | | 122 | 100 | | 磁器片1点 | | 長径12～25cmの安山岩質の剥離片・長径10～33cmの円礫 | SK05の真下ではなく、北側にややずれた位置から検出した。礎石側面および下端は円礫で充填している。礎石は下に向かってやや細くなり、逆四角錐形を呈する。 |
| C | 1 | S03-1 | 5.85 | 長方形 | 44 | 31 | 26 | 安山岩 | 2面5箇所 | | (80) | (60) | | | 少 | | 下に礎石剥離片と思われる石片を数点咬ませて水平を調整しているが、根石等はまったく無い。 |
| C | 2 | S03-2 | 5.55 | 長方形 | 43 | 19 | 36 | 砂岩 | | | | | | | 密 | 長径17～32の川原石 | 長径24cmと長径32cmの川原石が礎石の直上に乗る。川原石は根石として機能していない。 |
| C | 2 | S15 | (5.39～5.64) | 不定五角形 | 40 | 32 | | | | | | | | 土師質土器片2点 | — | 長径10～27cmの円礫 | 撹乱4内から検出。撹乱により水平は南北に傾いている。根石と思われる円礫や石片は散乱している。 |
| C | 2 | S16 | 5.80 | 不定五角形 | 55 | 26 | 32 | 砂岩 | 1面2所 | | 104 | 93 | | 磁器片1点 | 密 | | 礎石側面および下端は円礫で充填している。礎石は下に向かってやや細くなり、逆四角錐形を呈する。安山岩質剥離片が礎石上端周辺にやや散乱することから、直上に礎石が据えられていた可能性がある。 |
| D | 1 | S07 | (5.95) | 不定台形 | 58 | 39 | 36 | 安山岩 | 1面2箇所 | | (90) | (90) | | 染付片2点(遺物番号5) | 密 | 長径26cmの円礫 | |
| D | 1 | S08-1 | 5.81 | 不定台形 | 38 | 26 | 36 | 安山岩 | 3面8箇所 | 20cm四方の柱あたり | (110) | (90) | | 陶質施釉瓦1点 | | | S08-2との間に河原石と割り石を咬ませて水平を調整している。 |
| D | 2 | S08-2 | (5.50) | 長方形 | 60 | 28 | 37 | 砂岩 | (4箇所？) | | | | | 陶器鉢片1点(遺物番号6)、焼け粘土2点、磁器片1点、磁器皿1点(遺物番号7)、土器片1点、瓦3点(23・31・32・33) | 超密 | | あまり水平の傾きは見られない |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| D | 1 | S09-1 | 5.85 | 扇形 | 62 | 34 | 25 | 安山岩 | 2面5箇所 | 20cm四方の柱あたり | 107 | 57 | | | | | S09-2との間に円礫と割り石を咬ませて水平を調整している。 |
| D | 2 | S09-2 | | 不定台形 | 58 | 50 | 30 | 川原石 | | | 110 | 93 | | | 超密 | 長径26～32cmの円礫 | 西側に落ちこみ、水平が傾いてる。 |
| D | 1 | S10-1 | 5.94 | 不定台形 | 55 | 35 | 40 | 安山岩 | 1面2箇所 | 柱あたりビシャン仕上げ | 121 | 96 | | | | | 南側面にｵｵﾍﾋﾞｶﾞｲの貝殻付着。 |
| D | 2 | S10-2 | (5.63) | 長方形 | 50 | 36 | 40 | 砂岩 | | | 107 | 74 | | | 超密 | 長径11～27cmの円礫 | |
| D | 1 | S11-1 | 5.98 | 不定五角形 | 55 | 25 | 29 | 安山岩 | 1面5箇所 | ノミ切り | 96 | 87 | | | | | S11-2との間に割り石（礎石加工の際に生じた石片か）を咬ませて水平を調整。上面南西端にｵｵﾍﾋﾞｶﾞｲの貝殻付着。 |
| D | 2 | S11-2 | 5.70 | 長方形 | (60) | (42) | 30 | 砂岩 | | | 90 | 75 | | | 超密 | | 水平は南側に傾く。礎石は2つに割れ、南側に傾きながら、縦方向にずれている。 |
| D | 1 | S12-1 | 5.92 | 不定台形 | 55 | 26 | 25 | 安山岩 | | ハツリ調整 | 128 | 111 | | | 超密 | 長径10～30cmの礎石剥離片・長径12～21cmの円礫 | 成形の際に生じた石片を根石に利用している。また、この石片は東側の下端に咬ませて水平を調整にも利用しい。 |
| D | 2 | S12-2 | 5.70 | 長方形 | 66 | 30 | 29 | 砂岩 | | | 140 | 40 | | | 超密 | 17～22cmの円礫 | 東西に亀裂が入り2つに割れている。南側の石は、破断面が一段下がり、内側に傾いている。根石の円礫は礎石西側にはほとんどなく、東側に伸びるように詰められている。 |
| D | 2 | S13 | | 長方形 | 71 | 34 | | 砂岩 | 1面3箇所 | ハツリ調整 | 146 | 129 | | | 超密 | 長径10～28cmの安山岩質の剥離片・長径9～23cmの円礫 | 安山岩質剥離片が礎石上端周辺にやや散乱することから、直上に礎石が据えられていた可能性がある。 |
| D | 2 | S14 | (5.72) | 不定五角形 | 55 | 19 | 34 | 砂岩 | | | 93 | 83 | 42 | 土師質土器片1点、土師質土器皿片1点 | 超密 | 長径6～22cmの安山岩質の剥離片）・長径10～30cmの円礫 | 礎石側面および下端は円礫で充填している。礎石は下に向かってやや細くなり、逆四角錐形を呈する。安山岩質剥離片が礎石上端周辺にやや散乱することから、直上に礎石が据えられていた可能性がある。 |

## 第４表　石器観察表

| 遺物番号 | 出土地点 | 種類 | 器種 | 素材 | 法量（cm） | | | 残存状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | |
| 1 | 3層 | 石器 | 石鏃 | 黒曜石 | 2.1 | 1.75 | 0.4 | 脚部の一部を欠損。 | 剥片鏃。部分的に鋸歯状になる。 |

## 第５表　土器・陶磁器類観察表

| 遺物番号 | 出土地点 | 種類 | 器種 | 部位 | 法量（cm） | | | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 器高 | 口径 | 底径 | | |
| 2 | 1層 | 縄文土器 | | 胴部 | | | | 外　明赤褐(5YR5/6)<br>内　明赤褐(5YR5/7) | 胎土に滑石を含む。 |
| 3 | SK03 | 縄文土器 | | 胴部 | | | | 外　明褐色(2.5YR5/6)<br>内　にぶい黄褐(10YR4/3) | 外面は縦位の貝殻条痕、内面は斜位の貝殻条痕が施される。 |
| 4 | 4層直下 | 瓦質土器 | | 胴部 | | | | 外　オリーブ黒(Hue5Y3/1)<br>内　灰(Hue5Y5/1) | 内面にハケメあり。 |
| 5 | 5層直下 | 染付 | 杯・碗 | 口縁部 | | | | 釉調　透明釉<br>露胎　白色 | コンニャク印判 |
| 6 | S08-2礎石据付穴 | 陶器 | 鉢 | 胴部 | | | | 褐釉　にぶい黄褐(10YR4/3)<br>露胎　黄灰(Hue2.5Y5/1) | 外面は白土による刷毛目波状文。内面は白土による刷毛目横線文。 |
| 7 | S08-2礎石据付穴 | 磁器 | 皿 | 口縁部 | | | | 釉調　灰白(Hue5GY8/1)<br>露胎　灰白(Hue10Y8/1) | |
| 8 | S09-2礎石据付穴 | 陶器 | 鉢 | 胴部 | | | | 釉調　灰白(Hue5GY8/1)<br>露胎　灰白(Hue10Y8/1) | |
| 9 | S10-2礎石据付穴 | 陶器 | 皿 | 口縁部 | | | | 釉調　透明釉<br>露胎　灰白(Hue2.5Y8/2) | |
| 10 | S06-2礎石据付穴 | 磁器 | 皿 | 底部 | | | 4.4 | 釉調　灰白(Hue5Y7/2)<br>露胎　灰白(Hue2.5Y7/1) | 唐津系。高台は露胎で、高台内に兜巾が見られる。砂目積み。 |
| 11 | 撹乱1 | 陶器 | 鉢 | 胴部 | | | 5 | 釉調　灰オリーブ(Hue5Y6/2)<br>露胎　灰オリーブ(Hue5Y6/2) | 唐津系。高台は露胎で、高台内に兜巾が見られる。砂目積み。 |
| 12 | ケーブル溝 | 陶器 | 鉢 | 胴部 | | 10.8 | 4.4 | 釉調　灰白(Hue5GY8/1)<br>露胎　灰白(Hue10Y8/1) | 唐津系。胎土目積みで、高台脇まで釉薬がかかる。 |
| 13 | ケーブル溝 | 土師質土器 | 小皿 | 胴部 | | | 5.4 | 淡黄(Hue2.5Y8/3) | |
| 14 | ケーブル溝 | 土師質土器 | 小皿 | 胴部 | 1.4 | 7.6 | 5 | 浅黄橙(Hue7.5YR8/4) | |

## 第６表　軒桟瓦観察表

※　キラコ：表面にキラコ付着。　　接合A・接合B：接合技法。

| 遺物番号 | 出土地点 | 丸瓦部 | | | | | 平瓦部 | | | | 色調 | 焼成 | 燻し | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 文様 | 巻き | 法量（cm） | | | 文様 | 法量（cm） | | | | | | |
| | | | | 外径 | 瓦当径 | 巴径 | | 長さ | 瓦当幅 | 瓦当高 | | | | |
| 15 | 4層直上 | 三つ巴 | 左 | 8.9 | 5.7 | 4.4 | 唐草 | (7.9) | 14.7 | 4.8 | 外　暗灰色(HueN3/3)<br>内　暗灰色(HueN3/3) | 良好 | 良好 | 部分的に鉄分が付着。キラコ。 |
| 16 | 4層直上 | 三つ巴 | 左 | 8.5 | 5.7 | 4.9 | | | | | 外　灰色(HueN4/4)<br>内　灰色(HueN4/4) | 良好 | 良好 | 接合B。 |
| 17 | 4層直上 | 三つ巴 | 左 | 7.9 | 4.8 | 4.2 | 唐草または立浪 | | | | 外　灰色(HueN4/4)<br>内　灰色(HueN4/4) | 良好 | 良好 | キラコ。接合A。部分的に鉄分が付着。 |
| 18 | 4層直上 | | | | | | 唐草 | (2.4) | (14.0) | 2.6 | 外　灰色(HueN4/4)<br>内　灰色(HueN4/4) | やや不良 | やや不良 | キラコ。接合A。 |
| 19 | 北側撹乱 | | | | | | 唐草(中心飾り：逆ハート形) | (11.6) | (11.0) | 4.8 | 外　灰色(Hue5Y5/5)<br>内　灰色(HueN4/4) | 良好 | 良好 | キラコ。接合A。 |
| 20 | 2層 | | | | | | 唐草(中心飾り：菊) | (6.0) | (11.6) | 4.8 | 外　暗灰色(HueN3/3)<br>内　暗灰色(HueN3/3) | 良好 | 良好 | キラコ。接合A。 |

### 第７表　丸瓦観察表

| 遺物番号 | 出土地点 | 法量（cm） | | | | | | 色調 | 焼成 | 燻し | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 胴部 | | | 玉縁 | | | | | | |
| | | 長さ | 幅 | | 長さ | 幅 | 高さ | | | | |
| 21 | 2層 | (24.6) | | | 3.4 | (7.2) | | 外　灰色(HueN4/4)<br>内　灰色(HueN4/4) | やや不良 | やや不良 | |
| 22 | 4層直上 | (7.4) | | | (3.4) | (7.0) | | 外　暗灰色(HueN3/3)<br>内　灰色(HueN5/5) | 良好 | 良好 | |
| 23 | S08-2礎石据付穴 | (8.6) | | | | | | 外　灰色(Hue5Y6/1)<br>内　灰色(HueN5/5) | 不良 | 不良 | |
| 24 | 5層 | (9.4) | | | | | | 外　灰色(HueN5/5)<br>内　灰色(HueN5/5) | 不良 | 不良 | 外面は燻し不良により1/3が灰白（Hue5Y8/1）を呈する。 |
| 25 | 2層 | (15.9) | | | 3.5 | 11.7 | 5.4 | 外　暗灰色(HueN3/3)<br>内　灰色(HueN4/4) | 良好 | 良好 | 凸部中央周辺に「肥前・牛島製」の刻印がある。 |

### 第８表　桟瓦類観察表

| 遺物番号 | 出土地点 | 法量（cm） | | | 色調 | 焼成 | 燻し | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | | |
| 26 | 4層直上 | 31.1 | 31.7 | 1.8 | 外　暗灰色(HueN3/3)<br>内　暗灰色(HueN3/3) | 良好 | 良好 | 頭側面に菊文の刻印あり。部分的に鉄分が付着する。 |
| 27 | 4層直上 | (15.0) | (9.9) | 1.9 | 外　暗灰色<br>内　暗灰色 | やや不良 | 良好 | 内外に漆喰が付着する。 |
| 28 | S24<br>礎石据付穴 | (17.05) | (15.3) | 3.3 | 外　灰色(HueN4/4)<br>内　灰色(HueN4/4) | 不良 | やや不良 | 内面の一部は燻し不良で灰白（Hue5Y8/1）を呈する。 |
| 29 | S24<br>礎石据付穴 | (7.85) | (5.6) | 2.2 | 外　灰色(HueN4/4)<br>内　灰色(HueN6/6) | 不良 | やや不良 | |
| 30 | S24<br>礎石据付穴 | | | | 外　黒(HueN2/2)<br>内　灰色(HueN4/4) | 不良 | 良好 | 鉄分付着。 |
| 31 | S08-2<br>礎石据付穴 | (4.75) | (5.4) | 1.65 | 外　灰色(Hue5Y)<br>内　明黄褐色(Hue10YR6/6) | 不良 | 不良 | 内面の一部は燻し不良で灰白（Hue5Y8/1）を呈する。内側に燻しは認められない。 |
| 32 | S08-3<br>礎石据付穴 | (6.15) | (6.1) | 1.8 | 外　灰色<br>内　灰白色 | 不良 | 不良 | |
| 33 | S08-4<br>礎石据付穴 | (8.6) | (6.7) | 1.8 | 外　灰色(HueN4/4)<br>内　灰色(HueN5/4) | やや不良 | 不良 | |
| 34 | 2層 | (12.9) | (16.6) | 2.0 | 外　灰色(HueN4/4)<br>内　灰色(HueN4/4) | 良好 | 良好 | 凹面に12条の櫛文あり。 |
| 35 | 2層 | (15.0) | (15.4) | 2.0 | 外　暗灰色(HueN3/3)<br>内　暗灰色(HueN3/3) | 良好 | 良好 | 凸面に23条の櫛文あり。 |
| 36 | S18<br>礎石据付穴 | (9.4) | (7.0) | 1.7 | 外　にぶい黄褐(Hue10YR4/3)<br>内　にぶい黄褐(Hue10YR5/3)<br>胎土　にぶい赤褐(Hue5YR5/4) | 良好 | やや不良 | 陶質瓦。表面にキラコが付く。 |
| 37 | S19<br>礎石据付穴 | (10.5) | (11.2) | 1.7 | 外　黒褐(Hue2.5Y3/2)<br>内　にぶい黄褐(Hue10YR5/3)<br>胎土　にぶい赤褐(Hue5YR5/4) | 良好 | 不良 | 陶質瓦。表面にキラコが付く。 |
| 38 | 1層 | (6.9) | (9.2) | 1.55 | 釉調　灰黄褐(Hue10YR5/2)<br>胎土　明赤褐色(Hue5YR5/8) | 良好 | 無 | 陶質施釉薬瓦。胎土に0.5～3mmの黒色の砂粒が混じり、乳白色の粘土をマーブル状に入る。 |

### 第９表　銅製品観察表

| 遺構番号 | 出土地点 | 素材 | 種別 | 法量（cm） | | | 残存状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | |
| 39 | 1層 | 銅 | 襖引手・敷座 | 8.9 | 7.25 | 0.051 | 完形 | 花菱形。 |
| 40 | 4層直上 | 銅 | 引手金具・底 | | 5.8 | 0.027 | ほぼ完形。縁が腐食のため劣化。 | |
| 41 | 4層直上 | 銅 | 引手金具・胴 | (5.5) | (1.7) | 0.36 | 1/2 | |
| 42 | 2層 | 銅 | 不明銅製品 | 9.7 | 2.3 | 1.48 | 完形 | |

### 第１０表　角釘・不明鉄製品観察表

| 遺物番号 | 出土地点 | 素材 | 種別 | 法量（cm） | | | 残存状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長さ | 胴部最大径 | 頭部径 | | |
| 43 | 3層 | 鉄 | 角釘 | (7.5) | 0.35 | | 完形 | 頭から3.5cmに木質付着。 |
| 44 | 3層 | 鉄 | 角釘 | (6.35) | 0.4 | 0.9 | 完形 | |
| 45 | 1層 | 鉄 | 角釘 | (11.1) | 5.5 | 1.1 | 頭部～胴部 | |
| 46 | 3層 | 鉄 | 不明 | 8 | 0.7 | | 両端を欠損している | |

### 第１１表　鎹観察表

| 遺物番号 | 出土地点 | 素材 | 種別 | 法量（cm） | | | | 残存状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長さ | 高さ | 胴部径 | | | |
| | | | | | | 縦径 | 横径 | | |
| 47 | 1層 | 鉄 | 角鎹 | 13.9 | 4.5 | 0.8 | 0.75 | 片側の先端が欠損 | |
| 48 | 1層 | 鉄 | 角鎹 | 18.3 | 5.3 | 1.0 | 1.1 | 完形 | |
| 49 | 1層 | 鉄 | 角鎹 | 17.6 | 5.15 | 1.1 | 1.0 | 完形 | |
| 50 | 1層 | 鉄 | 角鎹 | 17.8 | 4.9 | 1.1 | 1.0 | 完形 | |

１～４層検出状況（東側から）

５a～５b 層検出状況（西側から）

５c～５d 層検出状況（西側から）

図版２

藤棚及びコンクリートテラス撤去前（西側から）

藤棚及びコンクリートテラス撤去後（南西側から）

調査前状況（南側から）

調査前状況　調査区南東隅（西側から）

調査区北西部　検出状況（南東側から）

S04-1 検出状況（南東側から）

S04-2　検出状況（北側から）

SK03 完掘状況と S29（南東側から）

S19 半裁状況（東側から）

S01　検出状況（南東側から）

S20 検出状況（北側から）

S05-1　検出状況（南東側から）

SK02 完掘状況と S06（南東側から）

図版4

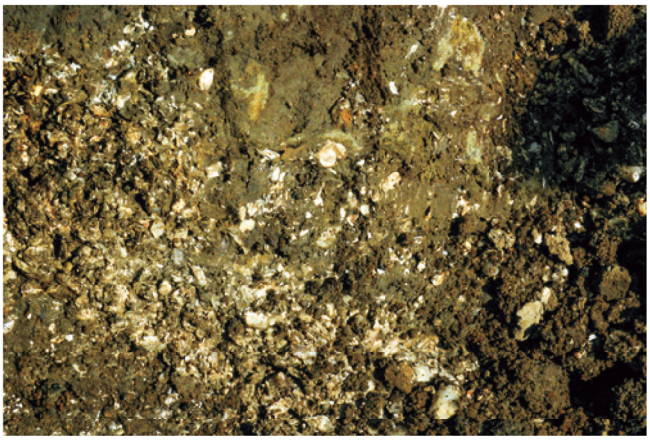
SK01 完掘状況と S28（南東側から）

S28 検出状況（南側から）

S02-1 検出状況（南東側から）

S17 検出状況（西側から）

S18 検出状況（東側から）



S18 下　貝殻集中層拡大

S23・S24 検出状況（北東側から）

S23・S24 検出状況（北側から）

S25 検出状況（北側から）

S26 検出状況（北東側から）

S26 検出状況（南側から）

SK05 完掘状況と S07（南東側から）

S27 検出状況（東側から）

S03 検出状況（南側から）

S03-1・S03-2 検出状況（東側から）

S03-1・S03-2 検出状況（西側から）

図版6

現在の御書院　昭和 41 年復元移転（北西側から）

御書院　縁側礎石・見切り石（南西側から）

S07 と礎石据付穴　検出状況（西側から）

S30・S31 検出状況（南側から）

S08-1　検出状況（北西側から）

S08-1・S08-2　検出状況（北西側から）

S09-1　検出状況（南東側から）

S09-1・S09-2 検出状況（西側から）

S10-1 検出状況（南東側から）

S10-1・S10-2 検出状況（西側から）

S11-1 検出状況（西側から）

S11-1 付着オオヘビガイ拡大

S11-1・S11-2 検出状況（北東側から）

S12-1 検出状況（北側から）

S12-1・S12-2 検出状況（南側から）

S12-1・S12-2 検出状況（西側から）

図版8

S11-1・S33 検出状況（南東側から）

S34 検出状況（東側から）

撹乱 4・S15　検出状況（東側から）

S13　検出状況　（北東側から）

S14 検出状況（北側から）

S14 検出状況（北西側から）

S16　検出状況　（北東側から）

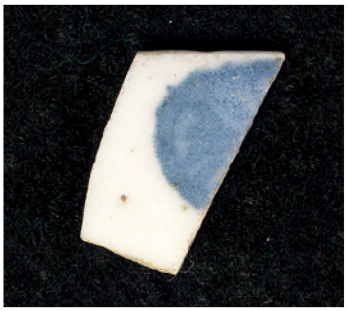
調査区南側４層検出状況　（西側から）

遺物番号 1

遺物番号 2

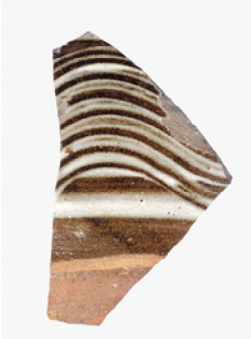
遺物番号 3

遺物番号 4

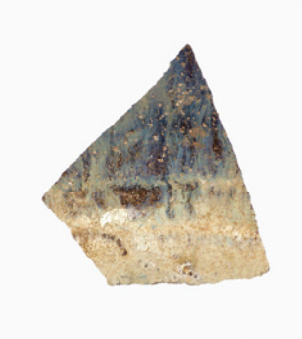


遺物番号 5

遺物番号 7



遺物番号 6



遺物番号 8

遺物番号 9

遺物番号 10

遺物番号 11

遺物番号 13

遺物番号 12

遺物番号 14

図版10

遺物番号 15・16・17　桟瓦

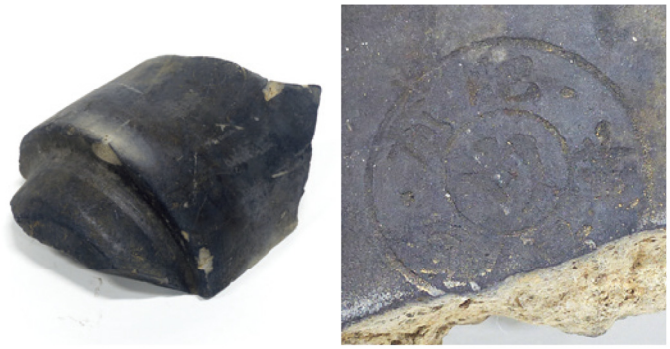
遺物番号 16　桟瓦　接合痕

遺物番号 17　桟瓦　接合痕

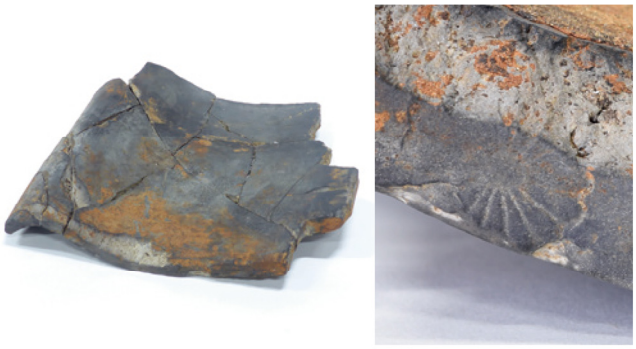
遺物番号 18　瓦当文様と接合痕

遺物番号 19　瓦当文様と接合痕

遺物番号 20　瓦当文様と接合痕



遺物番号 25　凸部の刻印拡大

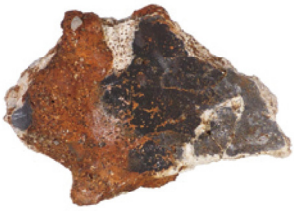


遺物番号 26　頭側面の刻印拡大

遺物番号 21

遺物番号 28

遺物番号 29



遺物番号 30

遺物番号 31

遺物番号 24

遺物番号 33

遺物番号 27

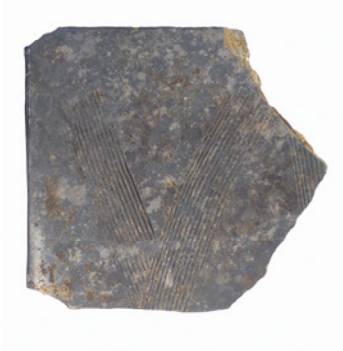
遺物番号 22

遺物番号 23　凹面

遺物番号 32　コビキ痕

SK03 出土　漆喰塊

遺物番号 36



遺物番号 34

遺物番号 35

遺物番号 38

遺物番号 37

弥生時代～中世の出土遺物
弥生土器（4 層上面）・須恵器（1 層）・青磁（撹乱 1）

図版12

遺物番号 39 ～ 42　銅製品

遺物番号 43 ～ 46　角釘・棒状鉄製品

遺物番号 47 ～ 50　鎹

遺物番号 43 角釘
X 線透過画像（保存処理前）

4 層直上出土　ネジ締り錠

学生ボタン（校章「高」の字の一部）

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふ り が な | いさはやけおやしきあと |
| 書 名 | 諫早家御屋敷跡Ⅱ |
| 副 書 名 | 長崎県立諫早高等学校図書館棟増設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 巻 次 | |
| シ リ ー ズ 名 | 長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 |
| シリーズ番号名 | 第２２集 |
| 編 著 者 名 | 前田加美、川道寛、古澤義久 |
| 編 集 機 関 | 長崎県埋蔵文化財センター |
| 所 在 地 | 〒811－5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触 515 番地1　電話 0920（45）4080 |
| 発 行 年 月 日 | 西暦 2017 年 3 月 31 日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所 在 地 | コード | | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| いさはやけおやしきあと<br>諫早家御屋敷跡 | ながさきけんいさはやし<br>長崎県諫早市<br>ひがしこうじまち<br>東小路町 | 42204 | 84-95 | 32° 50′ 42″ | 130° 3′ 4″ | 範囲確認調査<br>2015.8.24<br>～ 2015.8.28<br><br>本調査<br>2016.2.22<br>～ 2016.3.18 | 15 ㎡<br><br>120 ㎡ | 図書館棟改修工事 |

| 収録遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 諫早家御屋敷跡 | 城館跡 | 近世 | 礎石 | 土師器<br>陶磁器<br>瓦<br>角釘・鎹 | |

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第 22 集

諫早家御屋敷跡Ⅱ

2017（平成 29）年 3 月 31 日

発行　長崎県教育委員会
　　長崎市江戸町 2 番 13 号

印刷　株式会社 昭和堂